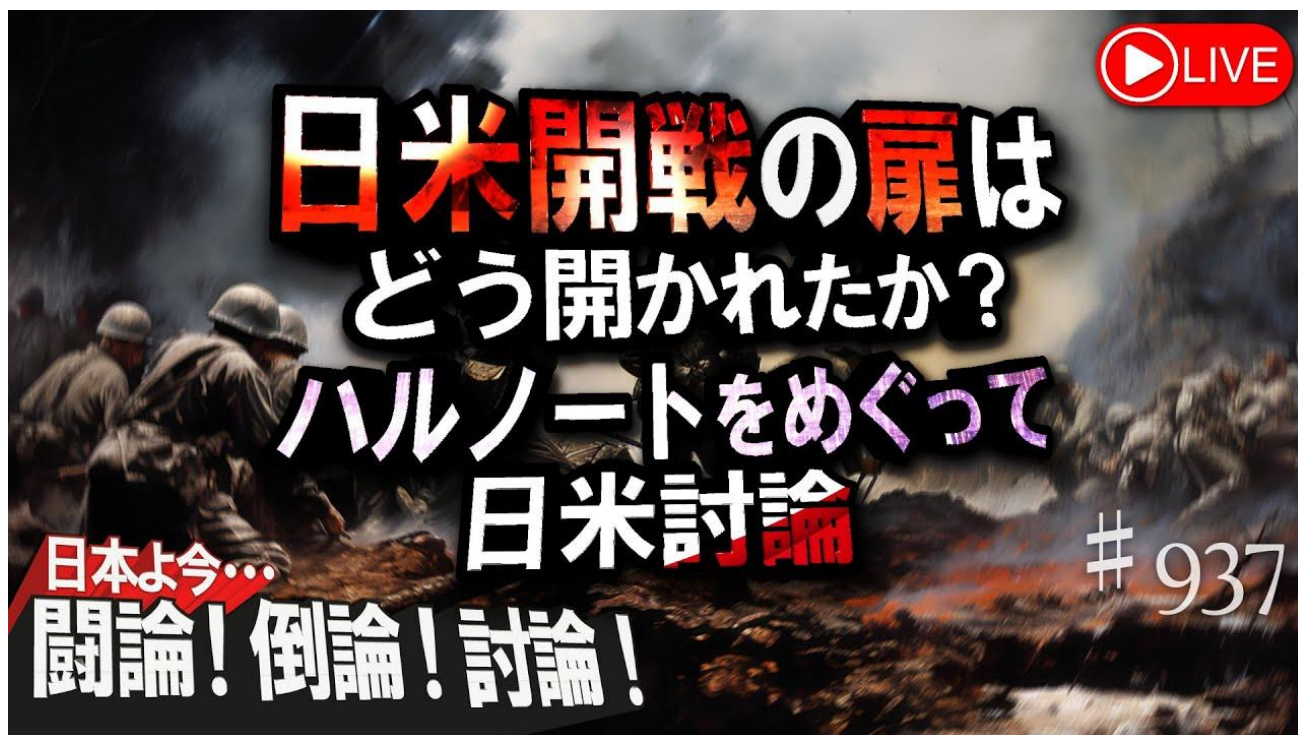




日本よ、今、闘論！倒論！討論！2025第937回

日米開戦の扉はどう開かれたか？

ハルノートをめぐる日米討論

R7/11/28

パネリスト：

小堀桂一郎（東京大学名誉教授）

ジェイソン・モーガン（歴史学者・麗澤大学国際学部准教授）

杉原誠四郎（国際歴史論戦研究所会長）

マックス・フォン・シュラー小林（元米海兵隊・歴史研究家）

矢野義昭（元陸上自衛隊小平学校副校長 陸将補）

司会：水島総

水島「皆さん、今晚は」

一同「(礼)」

水島「闘論！倒論！討論！2025第937回目の討論となります。間もなく12月8日

の開戦の日が来るんですけれども、昭和１００年、終戦から８０年といった年を迎えた年末の記念すべき、と言うとおかしいんですけど、そういう日であります。

今まで色々大東亜戦争の問題とかを話し合ってきましたけど、『日米開戦』の問題、一体、戦争は何故、始まらなきゃいけなかったのか。今のウクライナ、或いは、パレスチナと色んな問題がありますが、戦争は何故、始まるんだろう。本当にアメリカは、連合国のような民主主義とか自由の為に我々の国と戦ったのか。そんなことはない訳ですね。

実際、そういう意味でも、戦争は何故、始まるかというのは、今、間もなくウクライナを東アジアに持って来ようとか、私は一昨日の番組でそれについて、もう向こうが終わりですから、日本のウクライナ化が始まるというようなことを話したんですけども、そういう意味で戦争は何故、始まるかっていうことを改めて考える意味でも、日本の大東亜戦争の開始を皆さんで考えてみたいということでお招きを致しました。皆さん、一番、頭に浮かぶのは、ハルノートを突き付けられたことが直接的と言うか、こういったことが原因になっている。その前にも石油禁輸とか色んな形がある訳ですけども、そういう中で日本が大東亜戦争に突入していく過程と、戦争は何故、始まるだろうということを、皆さんと話し合ってみたいと思います。では、ご出席の皆さんをご紹介します。まず、東京大学名誉教授、小堀桂一郎先生です。宜しくお願いします」

小堀「どうぞ宜しく」

水島「国際歴史論戦研究所会長の杉原誠四郎さんです。宜しくお願いします」

杉原「(礼)」

水島「そして、今日は、神道学博士で元ジャーナリストの東郷茂彦さんがご出演なさるんですけど、今、連絡が取れなくて、まあ、どうなるか、またご連絡があればご紹介したいと思います。そして元陸上自衛隊小平学校副校長、陸将補の矢野義昭さんです。宜しくお願いします」

矢野「宜しくお願いします」

水島「元アメリカ海兵隊、歴史研究家のマックス・フォン・シュラー小林さんです。宜しくお願いします」

シュラー「宜しくお願いします」

水島「歴史学者で麗澤大学国際学部准教授のジェイソン・モーガンさんです。宜しくお願いします」

モーガン「宜しくお願いします」

水島「今日はこのメンバーでお送り致します。先程、この映像を見て戴いて解るように、もう猿、猿、猿、ですね。そして、かなり、ずうっとヒットして何本も作られました『猿の惑星』という映画ですが、原作者が、あの『猿の惑星』の猿は、日本人をイメージしているんだと、はっきり言っています。黄禍って言うんですかイエロー、黄色い禍という形の黄禍論っていうのは１９００年ぐらいから始まって、まず、黒人奴隷がアフリカから来て、その次に中国のクーリー（Coolie）というような形で入って来て、そしてカリフォルニアに日本人移民が入って、そこで畑を開墾して、あの辺は、牧場とゴールドラッシュの

白人ばかりでしたけど、そういう所を丁寧に畑や農業を始め、そして仕事を始めて会社を創り、町を創った訳です。

それで結局、皆さん、ご存じのように排日法といったもので、当時で言うと3億ドル。今のお金だとそんなものじゃ済まないと思いますけど、3億ドル、日本人全体の12万人の財産やそういうのを全部、没収された。そして12万人が17か所の収容所に収容された。

考えると、所謂、ホロコーストとか色んなことでユダヤ人のことは色々と言われますけど、あの当時、言われていたのが、敵は日本人とナチス。日本人とドイツ人じゃないですね。これは、あの宣伝、先程、見た猿の画なんかを見ると、ドイツ人と日本人とは言わないですね。敵は日本人とナチスだと。日本軍国主義じゃないんです、日本人なんですね。そういう意味では、非常に人種的な偏見があって、それが東京裁判、そのあとの占領政策、それから南京大虐殺の嘘。まあ、原爆投下で30万人、東京大空襲で200万人以上と言われるナパーム弾による日本人の無差別虐殺というものが、ずっと繋がっているんじゃないかと思います。

1900年代から日本の移民が始まる頃から、こういうものがあつたっていう、これについては私が今、映画を作り始めていますけれども、メインテーマにする。人種差別っていうのは、どの方も皆さん、おっしゃっていましたが、ここまで酷いものが、実は一貫して続いていたっていうのを、私は再発見しまして、これは、もう、はっきり白人と言うか、それによる日本人に対する人種差別がベースにあるんだっていうことを言わなきゃいけないんじゃないかというように思っています。

そういう中で東京裁判ですけど、小堀先生から冒頭に、このきっかけになっているハルノートの本質」

小堀「はい」

水島「とても吞めないようなものを押し付けられて、戦争を始めろと」

小堀「ええ」

水島「そういうような感じになっていると思うんですけども、皆さんにも、これを説明して戴いてから議論に入りたいと思うんですけど、その前に小堀先生の時間を戴きますので、皆さんから一言ずつ、この開戦の問題について、どんなお立場を持っているか、考えを持っているかを戴いてから、小堀先生の講義と言うかお話を伺いたと思います。では、杉原さんからお願いします」

杉原「いいですか」

水島「はい」

杉原「私は日米開戦、日米戦争については、特に外務省の能力が無かったですね」

水島「うん」

杉原「外務省が陸軍省の外務局というような形で存在していたら、もっと情報をきちんと取って、もっと分析してやったであろうと。日米開戦に関係しては、独ソ戦争が始まる時に、アメリカは日本と和解をしようと思って必死だったんですね。独ソ戦争が始まった時

に、日本がソ連を叩くのではないかとね。その機会を潰すし、それからその7月頃には態々、ルーズベルトがソ連を叩くつもりはないということを言ってくれと言った時に、ありませんと答え、どういうことかと言うと、ソ連を叩くということは、日米交渉の外交の札になるということを態々言って来てくれているのに、ただ、それをそういうつもりはありませんと直ぐに答えちゃうんですね。

それから、このハルノートの時ですけれども、アメリカの国民は反戦だったんです。戦争したくないという物凄い要望が強かったんですね。じゃあ、こういう風にして国民に訴えれば良かったんですよ。そうしたら、もう一発であれです。ハルノートには、これは仮案であるということが書いてありますが、あれはバレた時の為に、これは仮案だから本当は押し切るつもりじゃなかったんだということを言う為に、そういう工作があるんですね」

水島「はい」

杉原「そして日米開戦の寸前ですけれども、ソ連の中でドイツは勝てないということが解りかけていた時ですね。要するにモスクワの攻略が失敗したということが解った日ですね。そのことを外務省が全く分析しないで、軍部が居て言いなりになって開戦してしまっ

た。

ああ、それで、ちょっと余計なことになりますけれど（笑）、私はこういう本『日米開戦以降の日本外交の研究』で外務省のことを物凄く厳しくやっているんですね」

水島「うん」

杉原「これは中国語訳で、これが英語訳で、これが韓国語訳ですが、これが今、もう問題は解決しているんですけれども、政府のインターネットで日米交渉という公開のビデオがあるんですが、その時に外務省を批判する為に研究所の紹介の中で抜けていたんですよ。それで、これは、けしからんということで、国会議員の原田先生を使ってね、今は解決して研究所として載っていますけど、こういう風に、外務省の批判を指摘するということは非常に重要な事だと思うんですけれども、やっぱり体制の中で封じられるんですね。以上です、はい」

水島「はい。有難うございます。では、矢野さん、お願いします」

矢野「直接の原因というのは、東京裁判での清瀬弁護人の冒頭陳述でも言われていますけど、経済的な圧迫と、それから蒋介石政権に対する援蔣ですね。軍事支援。それと米英を中心とした軍事的締め付けという要因が挙げられているんですけれども、何故、そういう体制を創って、このルーズベルト政権が執拗に日本を戦争に追い込んだのかということについては、ドイツとイギリスの戦いに参戦するという、それは一つ、チャーチルの要請もあったとは思いますが、私は、それ以上にマニフェスト・デスティニーと言われて 있습니다けど、アメリカが新大陸を発見し、新大陸にピューリタンが入って建国をして、ずっと西部開拓をして来たんですけれども、カリフォルニア以南まで行ってアメリカ大陸では、もうフロンティアはなくなった訳ですが、その果てにある太平洋の対岸の日本列島、そして、その背後にある巨大な中国市場というものに対する帝国主義的野心って言うんですかね、まあ、こういうものが、まず日露戦争、前回、既にハワイ併合の頃からあった訳で、その時にセオドア・ルーズベルト達がもうオレンジ計画のひな型が作っていました。

日露戦争後の1906年からオレンジ計画という戦争計画ですけれども、これが策定されて数年間でほぼ原形が出来上がって、それは大東亜戦争、日米大戦まで基本的には変わっていないですね。その中の大きな特色というのは、アメリカ海軍と帝国海軍が恐らく一回限りの海軍同士の決戦をやるだろうと。しかし日本側の望む時期、場所で戦闘したとしても、我々は勝てるという見通しを既に最初からアメリカは立てていたんですね。

それだけ日本の軍事力というものは、確実に潰せるという見通しが既にあったと。その軍事的優位を前提に、私はアメリカの帝国主義的野心と言いましたが、20世紀初頭頃で、通貨発行権を握ったと。所謂、ユダヤ系の国際金融資本がシティの銀行ですけど、握ったという辺りからWASPを中心とした体制から所謂、グローバリスト、ユダヤ系国際金融資本を中心にした勢力がアメリカを牛耳るようになっていたと。

その勢力に押されて、特にセオドア・ルーズベルトの遠縁にあたるフランクリン・ルーズベルトが政権に就いて、それによって、このグローバリズムが徹底された」と

水島「うん」

矢野「それで、そこに共産主義者のエージェントとかスパイが入り込んで、日米開戦にもって行っただと。これは正にレーニン以来の資本主義の国同士を戦わせて、最後の両者が疲弊したところで戦争に参戦をして漁夫の利を得るといふ、基本的なソ連の戦略があったんですけれども、それによってグローバリズム、その当時の体制としては容共的なルーズベルト政権とソ連が組んで、最終的に大日本帝国とナチス・ドイツを打倒し、その勢いで、まずヨーロッパ、東欧がソ連に支配され、それからアメリカがテコ入れをして、実は国境内政についても蒋介石政権が勝てるまでいっていたのに、それを止めて軍事援助を、特に日本が投降して渡した武器弾薬を、満州が主ですけれども、これを中共の方に渡したと。

これをやったのはマーシャルですけども、このマーシャルとか、それから今日、出ていますハルにしても、或いは、一番、中心になったのはハリー・ホプキンス等ですけども、彼らが全て共産主義者、又は、そのエージェント、こういう連中でルーズベルト政権自体がほぼ完全に赤化されていたと。それで赤化されると、ルーズベルトとソ連のスターリンが組んで共産主義、まあ、広い意味で言うところのグローバリズムですけども、グローバリズムによって世界を支配するという体制を第二次大戦でつくったと」

水島「なるほどね」

矢野「これに対してナショナルな立場で抵抗したのが日本とドイツであって、この二つの体制を打倒したというのが大きな狙いだろうと。だからルーズベルトは3か月ぐらいで日本を屈服できると。原油が無くて海軍が動けなくなっているというのも判っていましたから、それが最終的な戦争挑発になったんですけれども、それによって行き掛けの駄賃で簡単に日本を打倒出来るという風に見ていたんですね」

水島「うん」

矢野「しかし、実際は非常に執拗な抵抗にあって、ドイツ以上に長く抵抗したんですけれども、いずれにしてもアメリカは当初から、戦争計画の段階から日本は簡単に打倒出来る。海軍力によって飛び石作戦で打倒出来るという構想を持っていましたから、その帝国主義的野心を実行できるだけの国力、特に軍事力と渡洋攻撃を出来る海空軍力と、それが

ら海兵隊の水陸両用作戦能力ですね。これの裏付けがあって、そこにこのグローバリズムの世界支配思想というものがアメリカの中枢を、特に政治外交に則って遂行したと。

それで日本は追い込まれて自存自衛の為に戦ったけれども、やはり国力が追い付かずに敗れたという経緯ではないかと見ています」

水島「なるほどねえ。ということは、どの辺からアメリカはね、第一世界大戦でイギリスに代わってナンバーワンの国になった」

矢野「はいはい、はい」

水島「例えば、よく言われるのはワシントン条約で海軍の比率をね…」

矢野「はいはい」

水島「こう決められたと」

矢野「はい」

水島「それだけじゃなくて、主力艦だけでなく補助艦の方までやられたと。それまでは太平洋艦隊と大西洋艦隊は分けると、太平洋は日本の帝国海軍の方が優れていたみたいなのがあって、その辺から色々始まったって言われるんですけど、アメリカの意図としては日英同盟をやめさせるぐらいから、もうアメリカにはあったっていいことですか」

矢野「そうですね。日本が日露戦争に勝利した時から、対日戦争計画というのがあって、日本を仮想敵として、いずれは潰すと。太平洋の覇権を握って中国市場を手中にするという、マハンが立てた様な長期戦略があったと。それが一番の原因だと思います。日本が邪魔だった」

水島「だからね、どうして始まったかって言うと、我々は大体、基本的にアメリカと戦争したいと最初は思っていなかった」

矢野「もう終始一貫、そうです」

水島「何とか折り合いをつけたいと思っていたという感じがあるんですけども」

矢野「ええ」

水島「何故、こういう風になったのかって凄く興味があって、今、おっしゃったように、もう、その辺から露骨に出て来るじゃないですか」

矢野「だから侵略国はアメリカであって、侵略された、自存自衛の為にやむを得ず戦ったのが日本だと。終始一貫、隠忍自重を重ねているんです。支那でも同じですけど」

水島「そうです」

矢野「今、言われた様に、あれだけの人種差別を受けながら、それでも日本は終始、融和外交を執った訳ですね」

水島「はい」

矢野「はい」

水島「その辺がね、ちょっと逆になっているんでね」

矢野「そうですね」

水島「戦後の歴史観っていうのは…」

矢野「それは、もう洗脳です」

水島「アメリカが民主と自由の為に戦って、我々は、軍国主義やナチズムと一緒に頑張ってやってみたいなね。歴史をそうやって、今も、もう現在、昨日まで今日まで、中国はそういうことですよ、アメリカと一緒にね」

矢野「うん」

水島「戦勝国で行こうぜっていうパターンをやっていますから。その辺、またね、歴史は繰り返している可能性があるのですね。ではシュラーさん、お願いします」

シュラー「そうですね。私も勉強していて、アメリカの準備が始まったのは1936年。それで新しい軍艦、軍機とか陸軍拡大とかを始めようとかって、これ、特に日本に。で、戦争の直前、八段階の計画を作ったんですよ。この計画は一応、日本に送って、送られた日本が反応する方は、それで戦争が始まる。例えば、太平洋艦隊がカリフォルニアの基地に入った時、それはハワイまで移動。じゃあ、日本も反応しない。オーケー。これもあったんですよ。ポップアップ・クルーズ。ポップアップっていう意味は突然、現れる。だからアメリカの軍艦14艦が日本の領海に入ります。

これは、実は、波の上、諸島にあったんですが。あと四国の宿毛。その当時、宿毛は、日本14船の基地だった。夜中に入ってくるので軍艦が全然、電気をつけていないとか、じゃあ、日本に撃っていたら、あれは日本が悪い、日本が悪いとか何かそういうことが出来る。それ、ずうっと探している。

あとシンガポールでも、オランダのジャワ島のスラバヤで、アメリカの軍艦も基地を入れようという計画もあった訳ですよ。それでアメリカ人がずうっと考えているんですよ。近衛総理大臣が本当に戦争しなくなかった。じゃあ、ルーズベルトに連絡して何処でも会いますと。船を東京湾、横浜で準備して会いに行きます。そして交渉します。それ、中国からも撤退しますよ。きっと中国。アメリカもきっと中国、欲しかった。自分の為。やっぱり中央の方が許されていると、南のフランス、入っている。

じゃあ、アメリカも北の方に入りたかった。じゃあ、それでも撤退しますよ。ルーズベルト、ハルの国務長官が、それを考えていたけれど、スティムソン戦争長官がノー、ノー、彼は元フィリピンの知事だった。その当時、フィリピンはアメリカの植民地だった。いや東洋人なんて信用できない。みんな、嘘ばかり言っているとかね。じゃあ、石油の制裁までいっているんですよ。それで絶対に解りました。真珠湾攻撃。当時、真珠湾は360度、周りに潜水艦や着水飛行機の偵察がありましたけど、この北の西の方、四分の一の所からルーズベルト大統領の命令で引っ張られたんですよ。

それは、やっぱり日本の機動部隊が来るのが判りました。それで3か所のラジオの周波数が盗聴されていますよ。サンフランシスコ、ハワイ、そしてフィリピンのコレヒドールで判りました。三角で何処に居るかが判った。だから来るのが判りましたよ。その時、空母を引っ張りました。ハワイから空母を別の所へ移動して、残っている戦艦は全部、第一次

世界大戦のベテラン、古い戦艦。一番、新しい戦艦のノースカロライナ式とかアラバマ式は、アメリカ東海岸で全然、ドイツ海軍、危なくなかったからね。

アメリカで私が12歳の時のことを覚えている。これを見て、お父さんに、おお、これはアメリカの罠だったじゃないかなと言ったら、お父さんが私をボーンっと殴ったよ。アメリカの海軍は、そういうことをする訳がないと。でも、しました。しました（笑）。

やっぱり、そういう戦争で日本が悪いとか何とか言っている。日本が最初に撃つように、そういう風に洗脳されている。今現在でもアメリカは他の所でそうやっていますよ」

水島「うん」

シュラー「事件を作って、ああ、私達は正義のアメリカ人で、それに反動していますとか何かね。これはアメリカ人に大切だから、はっきり罠でした」

水島「うん」

シュラー「罠でした」

水島「それは凄く大事で、実際は9.11事件とかね」

シュラー「うん」

水島「必ず大事件が突然、誰かが、みんな、真珠湾って言うのは大体、それに近い、そのあとイラク戦争が始まるとか」

シュラー「うん」

水島「この間のパレスチナの問題もハマスが攻めた。全然、知らなかったって言っているけど、モサドが知らない訳がないっていうね」

シュラー「ええ」

水島「そういうようなことをやって、次の大きな戦争になって行くと。このパターンが、結構、ずうっとアメリカの戦争の歴史の中に繰り返されているんじゃないかっていう気がしますのでね」

シュラー「そうですね」

水島「これも、また見なきゃいけない。そして、もう一つは、今、おっしゃっていたことと関連するのは、ブロック経済が始まっている」

シュラー「うん」

水島「自由貿易じゃなくて。というのは、今の流れは、トランプ大統領が関税とか、ある種のブロック経済的な流れを、もしかしたら、やり始めているのかも分からない。カナダと南アメリカと北米、北のアメリカとか色々な形でね、歴史が繰り返されるかどうかという、同じパターンを今、進んでいるのかも分からない。

その中で一番、被害を受けたのが実は日本だったんですよね。自由貿易という流れから、まあ、だから、今、お話を聞きながら、今の時代の事を考えなきゃいけないという感じがしました。じゃあ、モーガンさん、お願いします」

モーガン「はい。有難うございます。小堀先生の前に喋って恐縮です」

小堀「(会釈)」

モーガン「結論から言うと、あとで詳細を紹介したいと思いますが、アメリカ側と日本側の両方から物事を見ないと、多分、ハルノートのことは何故、あったのかと解らないなあと思って、まずアメリカ側からすれば、もう、これは、ずうっと前から、ルーズベルトは知っていたよとか、ルーズベルトは戦争を望んでいて、もう喉から手が出るほど、戦争をしたがっていたと。それは当然なことです。

ルーズベルトは1941年ぐらい、夏ぐらいまで多分、ドイツが最初の一発を撃ってくれるのだろーと思っていたという説があつて、結局、そうはならない。望んでいる通りにはならないので、じゃあ、次は日本に最初の一発を撃って貰いましょうと。そのようなことで、ルーズベルトが悪かったとか、そういうことも散々書いているアメリカの歴史家も昔、居ましたし、今、ルーズベルトは完全に聖人化して、ルーズベルトを聖人扱いしないと陰謀論者だとか。

ポイントとしては自由貿易と、先程、社長がおっしゃった黄禍論だと思います。自由貿易は、あとで説明したいと思いますが、黄禍論です。人種差別です。アメリカ国内の人種差別。それはアメリカから出て日本とか外国の立場から見ないと、多分、アメリカ人も解らないと思います。それは当然な事と言いますか、その歴史は、もう無くなっているっていう、今の説があるんですが、ちょっとお花畑のような考え方ですが、アメリカ国内では黒人をリンチして、その絵ハガキを親戚に送るとか…」

シュラー「ああ、リンチを説明した方がいいかもしれない」

モーガン「そう。リンチっていうのは、これは南北戦争が終わって、奴隷制度が一応、終わったんですけども、事実上は続いている訳です。奴隷制度。ジム・クロウ (Jim Crow) という法律群は、黒人が永遠に社会構造で一番、下の所に残るようにする為の法律で、ジム・クロウと言うんですけども、例えば、黒人が白人に対して、Sir とかと言わないとか、充分、敬意を表さないとか、理由は無くてもいいぐらいで、その黒人を、まあ、暴動して人をリンチするっていう、殺すということですね。首を吊る訳です。

そのことに参加しましたよとおと自慢する絵葉書を親戚に送る習慣がありました。そこまでナチス・ドイツでもやっていない。何故、アメリカが日本をコントロールしたかったかと言うと、ルーズベルトとコーデル・ハル (Cordell Hull) は、バリバリのレイシストでした。コーデル・ハルは、私と同じテネシー州で育ったんです」

水島「うん」

モーガン「ケンタッキーの方で、あの人は白人優越主義者で、白人が全世界を支配するのは当然なことだと思って、自由貿易を使って全世界を支配したいと。社長が先程、見せて下さったジョン・ダワー (John W. Dower) の本は、猿とかゴキブリとかですね」

水島「はい。はい」

モーガン「日本人がムカデとかになぞえられて、私が、ジョン・ダワーを大嫌いなのは、ジョン・ダワーの論説はどっちもどっちだって言うんですよ」

水島「うん。ああ、そうですね。はい」

モーガン「我々も悪かったんだけど、やっぱり日本も悪かったと」

水島「はい」

シュラー「うんうん」

モーガン「北部の連中は、そのようなプロパガンダに優れているんですよ」

水島「うん」

モーガン「本当にプロパガンダ嘘が上手ですよ。そうやって我々の人種差別問題は酷かったけれども、ジョン・ダワーが持ち出すのは八紘一宇ですよ」

水島「うん」

モーガン「八紘一宇は大和民族の優越主義政策だとか。それは全くないんです。そのような嘘について、先程、矢野先生がおっしゃったマニフェスト・デスティニーとか、社長がおっしゃったナパームとか焼夷弾を使って、無差別に日本人を殺戮する。それはベトナムでもやった」

シュラー「うん」

モーガン「非白人を殺戮する事がワシントンの趣味だと、私は何回も言っているんですけども、そのようなレイシストなグローバリストが全世界を支配している。じゃあ、日本側からすればどうですかと。騙されたとか罠に嵌ったとか、私もずうっと、そう思っていたんですけども、もしかしたら社長との意見はちょっと、ずれているところがあるかもしれないんですが、この安濃豊先生は日本が主体的に動いているという説で、例えば、先程、おっしゃった援蔣ルートとか、やっぱり、それが逆にいい口実だと、稲田正純大佐とかがいらっしゃってアジアを解放したいと。

日本が4月に南インドシナに入って、ルーズベルトがそれに反発する。その南インドシナ、今はベトナムですが、当時はフランスの植民地です。オランダの植民地、イギリスの植民地を、それを保護したいんです。フィリピンはアメリカの植民地、白人が永遠迄、アジアで支配することをずっと維持したいと。

私の考えでは、日本が騙された訳ではなくて、逆にルーズベルトはその攻撃が多分、来るだろうと判った。戦争がしたい。でも戦争がしたいというのはアメリカ側だけではなくて、日本も、もし太平洋艦隊を一撃で一掃できれば、アジア解放という大きな課題が出来るだろうという安濃先生の説はちょっと有力だなあと、私は考えていて、結果からすれば、アジアは解放されました。もう植民地は無い。日本以外ですね。

日本が生贄になって、身代わりになって、日本が全てを犠牲にしてアジアを解放したじゃないですか。それは、やっぱり日本側からすれば騙されたと。私の大前提はアジアを解放したいと。あと、日本人は馬鹿じゃない。日本人は、そう簡単に騙されるわけではないなあと、私は思っていて、自分のやりたいことがあって、それを達成する為に真珠湾攻撃をしたのではないかと考えています。逆にハルが騙されたと私は考えています。以上です」

水島「ね。はい」

モーガン「もう人種差別は黙ってはいられない。人種差別をそこまでやるのであれば、やはり日本は一丸となって、アジアを解放するぜと」

杉原「ハルが騙されたというのは、どういうことですか」

モーガン「例えば、ハルはその攻撃が来ると判っているので、まず日本側は、自分が突きつけた。所謂、ハルノートは、日本側が受け入れるはずがないと解かった上で、要は攻撃が来る時に、私達が主体性を持って、まず日本人を攻めている。一方的に日本人が罠に嵌るように仕掛けているように見せたいという動機があって、ハルが逆に日本のアジア解放運動に反動していったのではないかと考えています」

水島「そうですね。今、お聞きしたので、また、これを基に小堀先生に改めてハルノートの背景、或いは本質のお話を載いてから議論の方に入りたいと思います。小堀先生、宜しくお願いします」

小堀「はい。私も大東亜戦争ですね。一言で言えばアメリカが持っているマニフェスト・デスティニーというアメリカの宿命。アメリカ自身はそれを少しも悪いことだと、絶対に思っていない。これが自分の理想、自分達国民の理想だというぐらいに考えていた。で、それに立ち塞がったのが日本だった訳ですね。そこで戦争にならざるを得なかった。

ただ、今日はハルノート問題というのは一体、何かと言うのが主なテーマだと思いますので、その前提として、皆さんに、こういうことを申し上げておくべきじゃないかと思うんですね。つまり、大東亜戦争の開戦計画というのは、全ての現代史が重視するところでありますから、戦争史の全ては、この経過の研究に大きな枚数を費やしております。

従って、日本が対米開戦を決意する決定的な動機となりましたのが、昭和16年9月以降の東条内閣による日米交渉ですね。その経過については、戦争史を読む程の人ならば当然、よくご存じであります。でも中には、その日米交渉って一体、何だったのか、その中でのハルノート事件とは一体、何かという問題設定については、それ程、はっきりした理解をお持ちでないという方もおられるかと思います。

勿論、ご同席の方々は、よくご存じでありますけれども、このテレビの視聴者の中には、特に若い世代の方々の中にはおられるかもしれません。そういう方々を念頭に置きまして、昭和16年11月から84年の後にある現時点ですねえ。私共はハルノートが何故、日本国民に与えた衝撃について尚、拘り続けなくてはならないのか。これは、なるべく簡単にお話をしておきたいと思っています。

あの支那事変の勃発は昭和12年7月7日、盧溝橋事件を発端としてでありますね。で、この事変には、それより6年前の満州事変とは、まるで性格の違う戦争だったということです。

その年の12月に首都の南京が陥落致しますね。これで、この戦争は終わるだろうと、私も物心ついていた子供でありますから、ああ、敵の国の人々が陥落した、これで戦争が終わるんだというぐらいに思っていた訳ですね。ある意味で、日本の庶民層が持っていた古典的な戦争観っていうのは、そういうものであります。

ところがそうではなかった。以後、戦争が益々激しくなりまして、事変が発生した当時の近衛文麿内閣には、この事変を收拾する力が到底、無いということが明らかになってしまいう訳であります。支那大陸に派遣されました日本陸軍は、正に個々の戦闘では大体、勝利

を収めておりました、ところが、この勝利を重ねることによって、次第に大陸の奥へ引き摺り込まれて行きまして、正によく言われる比喻であります、泥沼に足を踏み込んで、進むことも退くことも出来ない状態になってしまった訳ですね。

その間、確かに支那に於ける日本軍の占領地を拡大致しまして、支那本国とアメリカを始めとする連合国の支那に於ける権益は、損害を被り続けます。日本の国力は、疲労し続けます。この事変の收拾の為に、中華民国の蒋介石政権に大きな影響力を持つアメリカ合衆国政府の居中調停ということがありますが、要するに中に入って調停をしてくれないかなあという気持ちは、日本人には非常に強くあった訳ですね」

水島「うん」

小堀「そこで、対支那和平交渉の正否が上手くいくかどうか、当の支那の政権に対するものではなくて、アメリカとの交渉に関わって来ると。考えてみれば、実に奇妙な事態になってしまった訳であります。こうして昭和15年7月発足の第二次近衛内閣の外務大臣でありました松岡洋祐ですね。この松岡洋祐が、日米交渉に於いてアメリカとの間に然るべき了解を成立させるということが期待されていた訳であります。ただ松岡洋祐という人は青年時代にアメリカに居て、非常に多くの苦労を経験したんですね。その為に、抜群に達者な英語力を身につけている一方で、自分はアメリカ人の物の考え方をよく知り尽くしているといった妙に偏った自負がありました。

またアメリカに対する意識が酷く戦闘的だった訳ですね。且つ昭和16年3月に松岡は、外務大臣としてドイツ、イタリアからソ連に出張致しまして、そこでアメリカが最も嫌っておりました日独伊三国同盟の絆の強さということを再確認すると。更にはソ連で、スターリンの大歓迎を受けまして、三国同盟にソ連を加えて四国同盟にするということまで考えていたらしいんですね。

ところが、その松岡の不在中に、近衛内閣がアメリカに派遣しました海軍大将の野村吉三郎大使であります、この人はどうも外交官としての資質に欠けるところがあったようであります。それで松岡は野村に深い不信を抱いておりますし、そこで日米諒解案の成立ということに、外務大臣として熱意を失ってしまっているのですね。

結局、昭和16年7月の第二次近衛内閣の総辞職と、第三次内閣の成立ですね。これによって、松岡を日米交渉から外すと。そういう政権交代、要するに松岡を外す為であったというような外観を呈した訳であります。

そして、この第三次近衛内閣は7月から10月までの非常に短い期間の内閣でありましたが、事変の解決には元より何の役にも立ちませんし、日米交渉にも何の功績も無かった。この間に、アメリカによる日本への外交的、及び経済的圧迫が厳しくなる一方でした。で、日米交渉の行き詰まりが、近衛に自分の政治的無力を悟らせたということだったかもしれせん」

水島「はい」

小堀「そこで昭和16年10月ですが、近衛は何ら成すところの無いままに、政権を投げ出してしまったんですね。そして東条陸軍大臣が新たに内閣を組織致します。東条という人は、昭和天皇がイギリス、及びアメリカとの開戦を何としてでも避けたいという平和維持への志が極めて強いということをよく知っておりました。昭和天皇のお志を固く支持し

たいという忠誠一方の軍人だった訳ですね。そこで東条は外務大臣に、当時、平和主義者として定評がありました東郷茂徳を起用した訳であります。その東郷茂徳を起用したということが即ち東条内閣が開戦ではなくて、事変の平和的な解決を本願としていたということの表れだったと言って宜しいと思うんです。

そこで東郷新外務大臣は、何とかして日米交渉の妥結を図ろうと考えまして、自ら二つの妥結案を考えて 当時、アメリカにおりました野村大使に充てて、これを打電致します。、まず甲案と呼ばれる提案がありまして、これを野村に伝えるんですが、この時、勿論、暗号通信をもって、送信する訳ですが、それは日支の間に、和平が成立するとすれば、これだけの時間が要ると思われた一定期間の後には、日本の軍隊は、支那の本土から撤去を開始すると。仏印ですね、フランス・インドシナ駐在の日本軍は、支那事変の解決を達成した時には、直ちに撤去するというのが骨子でありました。

ところが、そこに言うております『一定期間』って言うんですね、これは、どのぐらいを考えられていたかと言うと、実は25年ということで、随分、気の長い話だった訳ですね。その説明が、野村宛てには付いていた訳であります。ところが、この甲案というのが、日本外務省の暗号通信がアメリカ側に解読されておりました為に、実は内容が全部、読み取られていたのであります。その際、酷い誤訳が生じておりましてね、この甲案の内容は、アメリカには正しく伝わっていないんです。

もう一つ、東郷外務大臣は乙案という、より具体的で当面の努力目標という色合いが強かったものですが、乙案というのも出してあります。その乙案は、簡単に箇条書きで言えるんですが、第一にはフランス領インドシナ以外の南方地域に、日米両国とも武力進出をしない。それを日米両国で約束しようということですね。

第二に、このラインインですよ。オランダ領インドシナに於いて、必要な物資を獲得できるということは、これも日米間で保証し合うという提案であります。

第三に日米双方共、通商関係等を資産凍結以前の状態に戻す。この時はもう既に、日本の在米資産っていうのは凍結されておりましたから、それを元に戻そうと。また第四項は、日支両国の和平努力に、アメリカは何ら妨害を与える様な行動には出ないという。まあ、これが乙案と言われているものであります。

この二つの案で、日米交渉を続けようとしたんですね。この案は、日本側の要求が大き過ぎるとは、とても思えない穏当なものだと言って宜しいと思うんです。ですから、つまり東郷外務大臣としては、とにかくこの二つの案に基づいて、日米の了解の成立は可能であるという希望を抱きましてね、そうすれば、直ちに戦争に訴えるというような非常手段を執る必要はなくなる。その為には、自分が日本の好戦的な軍部を何としてでも説得してみせる。そういう一種の自信を持って、この日米交渉に臨んでいた訳であります。

ところが11月26日、日付から言えば一昨日に当たりますけれども、正式なアメリカ政府の提案としてではなく、ハル国務長官の覚書といった形で、問題のハルノートを、野村、来栖両大使が手渡される訳であります。勿論、野村、来栖両大使とも非常に驚いたんですが、この全文を受け取った時の東郷外務大臣の受けた衝撃というのは、甚大なものであります。そこで、東郷さんの回想録を通じて広く知られている台詞が吐かれることになる訳です。

以上は、これは、東郷外務大臣が獄中で書きました『時代の一面』という回想録ですね。

これは非常に重要なもので、日本の開戦経過と、そして、特にハルノートに関しては、もう必読の文献であります。それと東郷茂徳さんの伝記等を書きました萩原延壽さんという方の『東郷茂徳伝記と解説』という書物ですね。この二つが『外相東郷茂徳』という形で2冊を一纏めにしてあって、これが非常によく読まれた、我々にとって重要な文献であります。

もう一つ、ハルノート自体につきましては、先程、モーガンさんからご紹介戴きました、それは何だったでしょうか」

モーガン「安濃豊先生の」

小堀「ああ」

モーガン「はい」

小堀「もう一つ、『日米開戦外交と「雪」作戦ハルノートを書いた男』という須藤眞志さんという方の、これは新書版の冊子ではありますが、中々よく出来た研究であります。この二つの文献で大変、有名なセリフがあるんですけども、東郷外務大臣はハルノートの本文を読んだ時に『自分は目も眩むばかりの失望に打たれた』と。また『米国の非妥協的な態度は予てから予期したことではあるが、その内容の激しさには少なからず驚かされた』、ちょっと省略致しまして、また『米国が今迄の経緯、及び、一致している範囲を全て無視し、従来、執った最も強硬な態度さえ超えた要求を、ここに持ち出したのは明らかに平和的解決に到達せんとする熱意を有しないものである』。

つまり、まあ、要するにハルノートを見れば、アメリカには事態を平和の内に解決しようという意志は無いのだということを見てとったんだっていう、その受けた衝撃について、語っているんですね。『要求は、ただ日本に全面的な屈服を要求するものである』という、そういう悲痛な回想を残しております。こうしてハルノートというのは、日本に対する最後通牒である。会談による交渉の打ち切り宣言であるという風に受け取られた訳であります。

それならば、日本は今や鉾を執って立ち上がらざるを得ないというところまで追い詰められたんだというのが後世の一致した解釈になる訳であります。ところが、これには、実は色々余計な注釈も付けるべきかと思いますが、一つ付け加えて宜しいと思いますのは、後世、有名な解釈としてよく知られましたのが、東京裁判に於けるインドのパール判決書ですね。パール判決書に引用されております。

これは現代史家のアルバート・ノック（Albert Jay Nock）という人の評論ですけども『本旨の戦争について言えば、真珠湾の前夜、国務省が日本政府に送ったような覚書を受け取れば、モナコやルクセンブルグの様な国でもアメリカに対して武器を執って立ったであろう』という大変、有名になった台詞でございます」

水島「そうですね」

小堀「これが全てを言い尽くしている。あれだけのことを突きつけられれば、日本としては、もう戦争に立ち上がらざるを得ないという、これがハルノートの我々日本に与えた意義の最大のものと受け取らざるを得ない訳ですね。ただ、これは後に、また注釈すべきかと思いますが、必ずしも、これは日本の当時の政治外交関係者の全てが最後通牒と受け取った訳ではなかったのであります。

ハルノートの全文を日本国民が知りましたのは開戦直後の１２月９日のことで、この時には、もう戦争が始まっておりますから、もう、どうにもしょうがなかったですが、この時にハルノートというのは、実は最後通牒という正確なものではない。これも、また一つの提案とみなして、交渉の対象とすべきだという意見を持っておりましたのは、有田八郎という外交官であります。

彼は、第一次近衛内閣、平沼内閣、米内内閣で外務大臣を務めていた人物です。同じく、これは最後通牒ではないと見て、この内容を他の閣僚に理解させることが出来るようになって外相とは言えないと論じたのが吉田茂でありまして、この時、直接、東郷外相に対して、それが出来ないならば、お前さん、辞任しなさいとまで言ったそうであります。これは後に色々な文献に出ておりますけどね、まあ、そういう性質のものだったんですね。

日本が受けた衝撃は、この東郷外務大臣の回想の通りであります。ただ、それが必ずしも政治外交関係者の全員が、それに賛成だった訳ではないと。ここまでが、私が纏めた基礎的な知識として、ご説明申し上げておきたいと思ったことであります」

水島「有難うございます。小堀先生ね、今の最後の、吉田茂にしろ有田にしろ、この話で言うと、よく最近、言うのは、もうちょっと、のりりくらしでも良かったんじゃないかと。時間稼ぎで、はいはい、あんたの言うことも解るけど、そう、簡単には出来ないでしょう、みたいなね。時間稼ぎをやったらどうだと。或いは、例えば国際連盟の脱退もね、恰好は良いかも分かんないけれども、あんたの気持ちも、リットン報告なんていうのは、それ程、凄い、めちゃくちゃ追い詰められるものじゃなかったんでね」

小堀「ええ」

水島「もう少し時間というね、のりりくらし路線もあつたんじゃないかっていう言い方はする、まあ、私なんかもう思っているところがあつたんでね、今のお話を伺うと、そのハルノートっていうのは、我々は、みんな、切羽詰まった形でね、それしかないみたいなイメージは持っているんだけど、どうなんでしょうね」

小堀「ただ、もし、のりりくらしで日米交渉を続けるとしたら、あらゆる意味で、日本の戦争は不利になった。まず真珠湾の攻撃なんかまで出来なくなったでしょうね」

水島「そうですね」

小堀「それから、つまりのりりくらし路線ではねえ、それは日本の信用がどんどん落ちて行くばかりで結局、アメリカに時を稼がせるという効果しか無かつただろうと思います」

水島「なるほどね」

小堀「ですから有田八郎元外務大臣とか吉田茂が、あれは最後通牒ではないという意見を出したそうですけど、私は逆に、吉田茂は何を考えていたのかなあという非常に不思議な気が致しますね」

水島「なるほど。今言った様にね、その問題は、やっぱり、いつも出る話なので、ということは少なくともアメリカは最後通牒みたいな形で出していますよね」

小堀「そうなんです」

水島「絶対、呑めないだろうと」

小堀「ええ」

水島「戦争しかないだろう、みたいなね」

小堀「ええ。もう、これで自分の国務長官としての役割は終わったと。あとは陸軍と海軍にお任せするよと言ったのは、要するに、これで日本は戦争に踏み切るだろうよ」

水島「うんうん」

小堀「要するにアメリカの挑発に乗るだろうよという感触は充分、あったからですね」

水島「あったですねえ」

小堀「私はそう思っています」

水島「杉原さん、何か」

杉原「のりりくらりと言うのは、石油は一日、一日、減っていく訳ですね。それから、南方作戦で気候の関係があるんですね。波が高くなるとかね。ですから、開戦するならばギリギリで12月8日だったんですね。そういう切羽詰まっていたことがあるから、まあ、のりりくらり出来なかったんです。出来なかったんだけど、しかし、先程、言いましたように、アメリカ国民は反対していたんですから、こういうものを突き付けられているんですよということを公表すれば良かったんです。

更にもう一つは、ルーズベルトの狡猾さは日米暫定協定案っていうのを作っているんですね。それは一定期間内、日本の立場を理解する様な。だけど、それをわざとジョセフ・クラーク・グルー（Joseph Clark Grew）に知らせるんです。どういう知らせかって言うと、これを出さないことにしたということにするんです。それを日本の陸軍が解読する訳です」

水島「うん」

杉原「それで東郷からすると、このハルノートは最後通牒だという風に、その電報を読んだことによって、そういう判断をするんです。だから物凄く仕掛けています。だから、日本がアメリカの外交電報を読んでいるというのは知っていたんです。だから、態々日本が解読できる電報をグルーに渡すんですから、中国の蒋介石にも知らせるんですね。

それで日本の陸軍がそれを解読して、それを見たら暫定協定案を出さないことに決めたんだから、もうハルノートは最終だというね。だけど、その時に、日本は戦争を挑発されているんじゃないか、謀略ではないのかと。どうしてそういう発想が出来なかったのかね。外務省は集団討議をしないんですよ。東郷一人だけの考え方で、外務省の判断にするんですね。もっと、みんなで話をすれば、これは挑発ではないかという風な考え方も出来るし、それからアメリカ国民はドイツがあんなに色んな事をしているといっても、アメリカ国民は怒らなかったんですね。

要するに戦争が嫌いだからですね。だから、それに対してハルノートを突き付けられているんだって公表すれば、一発で引っ込めたんです。ですから先程、言いましたように、この案は仮案であるという文言を引っ付けていたんです。それは引っ込めざるを得ない時、そういう意味で、その前後を見た時に、いかに外務省というのは無能であってね、結局、陸軍から見た時にね、邪魔ですよ。だから陸軍が外務局として外交権を持っておれば、も

っと分析をして、もっと機会を生かしてやると思うんですね。うん」

小堀「東郷茂彦さんがいらっしゃると思ったもんですから…」

杉原「遠慮されたんです（笑）」

小堀「ええ。それで、実は、これは東郷さんと随分、議論をしたことで、今日もお出でになったら、どういう風に申し上げたらいいかなあと思っていたところなんですけどね」

水島「なるほど」

小堀「つまり、要するに、今度は本当に私の意見であります」

水島「はい」

小堀「何故、東郷外務大臣は、あの時にハルノートの内容を新聞に公表しなかったのかという」

杉原「そうそう。そうです、そうです」

小堀「それですよ」

杉原「そうです」

小堀「もしね、その時、新聞にこれを公表すれば、それは当然、新聞は恐らく全文を載せるでしょうね。そうしますとね、後にパール判事が同情的に見て下さった通り、あれだけのものを突き付けられて、つまりモナコ公国でさえ立ち上がったぞと言われるような文章を突き付けられて黙っているはずがないんだというね。その見方が恐らく世界中に広まったと思うんです」

水島「それはそうですね」

小堀「そうしますとね、少なくとも、あれだけのことをされたら日本が戦争に立ち上がったのも仕方がないよなあという、そういうのが、恐らく世界の世論になり得たんじゃないかと思うんですよ」

水島「そうですね」

小堀「東郷さんには、しかし、また別の意見もおありだったようで、あの時、全部、公表してしまえばという私の意見にはどうしても与なさらないんで、今日もいらっしゃったら、もう一度、本音を伺いたいなあと思っていたところです」

水島「ちょっと、ハルノートに関してはね」

小堀「ええ」

水島「その話はお聞きしたかったんですけど、未だ連絡がとれない状態みたいになっているので非常に残念ですけどね」

小堀「残念です」

水島「今日、いいお話を伺っていますが、やはり、その問題は凄く大きいと思いますよ。それと巷によく言われる宣戦布告の通告というのも、これは本当にそのまま信じていいん

ですかねえ。所謂、通告がね…」

小堀「ええ」

水島「何か外務省の役人の怠慢でね、実際の時間より2時間位、遅れたとか、よく言われているんですが、そんなことって…」

杉原「あるのかと…」

水島「こんな緊張状態の中でね」

小堀「ええ」

水島「今のお話だとねえ、それこそ東郷さんじゃないけど、大ショックを受けた」

小堀「ええ」

水島「そうになると、戦争しかないんじゃないかみたいなね」

小堀「(頷く)」

水島「そうなっている状態で、麻雀やって2時間も通告が遅れるなんてあり得ないんじゃないかっていうねえ」

杉原「あれねえ、やっぱり外務省の一つの本当に大きな欠陥はね、日本は大使館の中でも議論をしないんですよ」

水島「う～ん。いや…」

杉原「議論をしたらねえ、これは挑発かもしれないというね」

水島「そうですよ、だから、それだけの国家的に大変な危機の中で、こういう問題をねえ…」

杉原「それとねえ、もっと言わせて戴ければ、タイプを打つ人が一人しか居なかったというね。そして、その一人もタイプが打てなくて一本指でやっていたって。外交官がいっぱい居るのにタイプを打てなかったんですよ」

水島「っていうのも、だから…」

杉原「だからねえ…」

水島「色々ねえ(笑) ちょっと、にわかには信じ難い」

杉原「だから外務省はねえ、明治以来の外務省は信じられないほど無能なんです。だから、それを書いているから、この本が没にされているんです(笑)」

水島「それで、そのあと、また戦後ね、その役人さん達は出世しているっていうねえ」

杉原「それが吉田茂がっていうことでしょ」

水島「ああ、だから、そうなんですよ」

杉原「ですから、それにあって、外務省の戦争責任も隠したんですよ。吉田茂がね。で、

そうすると自虐史観しか残らない訳ですよ」

水島「うん」

杉原「要するに、あの戦争は軍部が勝手にやったし」

水島「うん。いやいや、そうなんですよ」

杉原「悪い戦争だってね。そういうことを、あの吉田茂は戦後に残したんですよ」

水島「吉田茂もそうですけどね」

小堀「ハルノートとは、また別の問題ですけど、あの時の在米日本大使館の怠慢ですね。これは本当に万死に値すると言って宜しいと思うんです」

杉原「そうですよ」

水島「いやいや、そうでしょう」

杉原「軍隊でしたら銃殺ですよ」

水島「普通、もう戦争が始まったところでね、みんな、アメリカ人の前で腹を切らなきゃいけないってね」

杉原「それでね、

水島「私はミスをやったので、こんな風になっちゃって申し訳ないって、腹を切ればだいぶ違いますよ」

杉原「ですからね、もう一つ、言わせて戴くとね、その戦争が始まった時に、未だ大使館は閉鎖されていなかったで新聞記者がいっぱい押し寄せたんですよ。その人達に、何故、本当は1時に渡すのが遅れたんだっていうことを一言でも言えればいいんですね。本当はね。ですから本当の責任者は、新聞記者の前でピストル自殺すればよかったんです。自分の責任で、こういう…」

水島「それこそ腹切りやってね」

杉原「そうそう、そうそう」

水島「そうすれば、日本人はそういう卑怯者じゃないっていうことを示せる」

杉原「新聞記者が大使館に押し寄せて来ているのに、一言も説明していないんですね」

水島「そういうね、どうも、その辺が曖昧で、ハルノートを受けてからの話っていうのは、どうもね、それから、まあ、これを言うと、いつも大東亜戦争やっているからあれなんだけど、何故、ハワイを攻撃した時、上陸しなかったんだ」

杉原「ああ、それから石油タンクを壊さなかったとか（笑）」

水島「例えば造船所のね」

杉原「そうそう、そうそう」

水島「あの石油タンクを爆撃しなかったんだ。何かおかしいじゃないかと。現場の事だか

ら色々あると思いますけど、そういうのが次々に今、謎になって出て来ている事は確かですけど、じゃあ、またハルノートに戻りますけど、どうですか、それぞれ、皆さんに今、お話をお聞きしたので、感想をお願いします」

矢野「はい。ハルノートを受けても、それをいなしながら、ずるずると、交渉するという一つの方法が取り得たと思うんですけども、両先生が言われた様に、軍事的視点から見ると、特に海軍の油が、あと3か月ぐらいしかもたないです」

水島「そうですね」

矢野「それと、さっき言われた気象の問題とか、戦争の準備体制ですね。この辺の日米の格差というものを考えると、もうアメリカは既に航空機とか増産体制へ入っていましたから、時間と共に戦力的に不利になると。その軍事的なギリギリの要求が、正に12月8日という時点だったと思うんです。独ソ戦もあと3か月待てばモスクワ攻防戦とかで、ナチス・ドイツが止まって先制が逆転したんですね。だから、あと3か月の、その僅かなタイムリミットの間で、日本にそれをやるだけの国力、余裕があればですねえ…」

杉原「しなかったかもしれない」

矢野「戦争をしなかったかもしれない」

杉原「そうそう、そう」

矢野「そこのところが非常に、まあ、これは、もう言っても仕方ないことですけどね」

杉原「不運に不運が重なっているんです」

矢野「ただ、それだけの…」

水島「相当ねえ」

矢野「ええ」

水島「これは私のあれですけど、もし、本当にハワイにちゃんと上陸して占領できれば、太平洋のアメリカの艦隊は簡単に動けなかった。だから当分、このアジアへ、こっちに来るまで物凄く時間がかかったってね。まあ、そういう軍事系の人が書いているのを見たことがあってね。つまり時間稼ぎの為に、やるんだったら徹底してやるべきだった。それから石油タンクの問題もね」

杉原「ねえ」

水島「つまり、そうすると、もう西海岸が晒されることになる。そうすると、日本の機動艦隊が西海岸から行って艦砲射撃まで出来るっていうね。そういうような、戦力比が大西洋艦隊と分かれていたから、未だ日本海軍が、ちょっと、これは誤解になるかならないのか、矢野さんにも聞きたいけど、太平洋に関したら、そこそこやれるというか、五分五分でやれるみたいに思っていたということも、ちょっと読んだことがあるんですよ」

矢野「それは、ある程度、数か月間…」

杉原「そうそう、そう」

矢野「引き延ばすことは出来たでしょうけども、特に西太平洋はともかく、東太平洋まで

出て行くというのは、ロジスティックの兵站支援距離という問題があるんですけど、これは、二乗で効いてきますから、とてもアメリカ近海まで行って攻撃するというのは…」

水島「いや、西海岸はあれとしても、ハワイっていうのは完全な拠点だったから、あそこで…」

矢野「ええええ。だからハワイを潰すことは、一時的に機能マヒさせることは出来たでしょうけど、実はアメリカはオレンジ計画を立てただけじゃなくて、動員体制から緊急増産、備蓄とか、そういう戦略的な戦争準備を昭和の初め頃からやっているんですね。それで、渡洋爆撃をする為のB29の大型エンジンとか、それから当時、不可能と言われた太平洋を越えて海兵隊を水陸両用強襲作戦で送り込む、その為の編成装備や訓練ということを数十年かけて積み上げてやっているんですね」

水島「うん」

矢野「そういう戦争準備というものは、日本側は東京裁判でも言っていますが、そういうことは仮想敵と言いながら、実際的な準備は全くやっていないんです。だから準備体制が違いましたから、一時的には戦術的、作戦的にですねえ…」

水島「っていうことは…」

矢野「ハワイの機能を麻痺してでも…」

水島「戦争をやらなかった方が良かったと」

矢野「いや、そうじゃなくて…」

水島「真珠湾攻撃は出来ない」と

矢野「本来は帝国国際遂行要綱の中で、西太平洋で迎撃をして、有利な近距離に引き付けてから艦隊決戦に挑むという、それは陸軍も海軍も合意した戦略計画がありまして…」

水島「ああ、なるほど」

矢野「それで一撃を与えたあと、マレーからインド洋に出るという、そういう論もあった訳ですよ。だから、そういう戦略を執っていれば…」

水島「だからミッドウェーはハワイの焼き直しじゃないですか」

矢野「ええええ、ええ。だから同じ間違いを2回やったということです」

水島「つまりハワイでやっていけなかったことをミッドウェーでやろうとして大失敗した訳でしょ」

矢野「あれも、おっとり刀でやって戦略的には非常に意味のない戦いですねえ」

杉原「そうそう、そうそう」

水島「うん、だから最初にやらなきゃいけないことをね」

杉原「戦術的にもおかしいですね」

矢野「戦術でもないし、索敵を怠ったとか色んな問題があります」

水島「戦術的には色々あると思うんですけど、皆さんにハルノートの問題を…」

矢野「あ、そうか」

水島「聞きたいと思いますけど、どうですか」

シュラー「そうですね、どうしてもアメリカが戦争をやりたかったら、ただハワイの侵略だったら、本当に真珠湾攻撃と一緒にしたら可能性あったかもしれないけれど、あといていたのはインド。インド侵略の方が、もっと面白い。インド侵略がなかったらイギリスは完璧にだめだった。だからインドは最初はね、私が見ると、インドの三分の一ぐらいが、その時、日本と同盟になっちゃう。

因みに東京銀座の昭和通りにインド料理屋さんがあるんですよ。それで、あのネルソンが今、店長だったらお爺さんが革命者だった。それがイギリスから日本に逃げて来て、インド料理を作った。東京で初めてのインド料理だったかもしれないね。でも結構、色んな独立の運動で日本に逃げて来たんですよ。だからありました。戦争の3年後に始まってインパール作戦、牟田口將軍だったかな、牟田口廉也（むたぐち れんや）陸軍中将だったね。ミャンマーからビルマ、昔のビルマから侵略したけど、あれも遅かった、遅かったけれども、もしね、戦争の始めぐらいだったら可能性があったかもしれない。インドのあちこちで革命が始まったかもしれない。それでイギリスは戦争が出来たかどうか、まあ、アメリカも完璧に支持する必要になっちゃうかもしれない」

水島「やっぱり」

シュラー「それが失ったチャンスですね」

矢野「かつ、中東でリンクアップできたかもしれない。ロンメル軍団と…」

シュラー「うん。そうそう。それ、本当に」

矢野「本当にインドも抑えられたんだ」

シュラー「中近東でね、日本とロンメル軍と握手できたかもしれない（微笑）」

矢野「かもしれない」

水島「ね、その大東亜戦争の戦術というか、そういう戦争の現場論だと色々ね、もしかしたら、これが出来たかも分かんない」

シュラー「それで、ちょっとチェイスンさんが言っていてね、何かドイツの事、アメリカに攻撃すると思っていたけれど、戦争が始まる前からアメリカはドイツに半年間ぐらい攻撃ありました」

水島「うん」

シュラー「大西洋で、貨物船の船団をアメリカが中央太平洋まで、アメリカ海軍がエスコートしました。それで真ん中の地点でイギリスの海軍にイギリス迄。それでヒットラーが潜水艦の船長達に、アメリカの軍艦から攻撃があっても反動しないで、ただ逃げてと。でもね、ある船長が攻撃した。それで1隻のアメリカの軍艦、ルーベン・ジェームズ（USS Reuben James, DD-245）という駆逐艦が沈没。あっ、覚えていますね。アメリカの新聞では結構、話題になっていた。何故、うちの軍艦が大西洋で沈没したんですか。私達、平和

の国、アメリカは戦争しないって結構、話題になっていたからね。でもルーズベルトは、どうしても戦争に入りたかったね」

水島「まあ、そういう意味でね、そのハルノートの受け取り方によって、軍の対応も違ってきただろうということになるんですけど、よく山本五十六が実はアメリカのスパイだったとか色んな説を言う人達も、こういうネットの中では沢山、居てね、それと、もう一つは東京裁判の、なんでしたっけ、途中で肺炎で亡くなられた元帥なんかは完全にアメリカと繋がっていたとか、巣鴨で窓を開けっぱなしにされて殺されたとか色々、私も巣鴨のことは調べてみると、非常に奇妙な色んなものがあるということは、私も感じるんですけど、さっきもハルノートについては、おっしゃっていましたが、聞いた上でどうですか」

モーガン「はい。有難うございます。私の考えは、もしかしたら先生方と、ちょっと異なるところもあるかなあと改めて思いまして、大東亜戦争はアメリカが主役ではないと思います」

水島「うん」

モーガン「結局、アメリカが日本に来て占領して洗脳工作を始めると、戦争のネーミングをどうしても『太平洋戦争』に切り替えたいと」

水島「うん」

モーガン「『大東亜戦争』は禁止。その言葉。『太平洋戦争』のネーミングにするとアメリカが主役になるじゃないですか。あのハワイ攻撃が大きな事変になって、アメリカが太平洋を勝ち取る為に戦争をやったと。でも日本側からすれば、太平洋はどうでもよかったじゃないですか。あの真珠湾攻撃は時間稼ぎと言いますか、もう切羽詰まって油の問題もあったし、やっぱり動くとなれば今だと。」

アメリカという敵は陰に潜んでいて、その敵を一掃して敵の反撃は当然、来ると解った上で、でも、あくまで日本はアジアが主な舞台でアジアの解放の為に動いていて、そう考えると真珠湾攻撃は、ただの時間稼ぎ。何故、石油タンクを狙わなかったかという指摘について、吉岡政光さんという方が106歳でお亡くなりになられて、あの方と一回、お目にかかりまして、自分が撃沈した人間で、油田を狙うと言われて、もう、やっぱり煙とかで見えないという…」

杉原「ああ、それもあります」

モーガン「戦の中で、いくら、この船を狙いなさいと言われても、やっぱり現場に入ると、まあ、カオスとはおっしゃっていないですけども、色んな戦としては、自分が企画した通りに展開しないところあるかなあと、でもハルノートについては、これは、どう考えても1941年っていう転換期で、世界はどっちに行くかって、ソ連とワシントンが望んでいる白人が全世界を支配するグローバリズム、それは、ソ連版グローバリズムかワシントン版グローバリズムと。」

ハルノートについてですけども、コーデル・ハルは1943年に国連憲章を書いた人間です。もう一人、居たんですよ。ハリー・デクスター・ホワイト（Harry Dexter White というソ連のスパイが…）」

シュラー「そう」

モーガン「ハルと二人で国連憲章を書いて、ルーズベルトが望んでいる Four (4) Policemen、アメリカ、イギリス、ソ連と中国、蔣介石が全世界を支配するように。それで私が一番大事だと思っているのは、ちょっと変化球かもしれませんが、コーデル・ハルって国務長官としてハルノート沙汰がある前に、善隣政策と言うんですか、ラテン・アメリカは、もうアメリカが侵略しないよ。自由貿易をやって、ワシントンとラテン・アメリカが仲良くすると。要は、それはモンロー・ドクトリン、次の一步として、アメリカが自由貿易を使って、数年前までのグローバリズムを、まず、ここで建築する。そのアジア版もやりたいと思って、その善隣政策っていうのは、英語で Good Neighbor Policy、まず関税を無くす、自由貿易をする。そうすると、アメリカ国民もラテン・アメリカ諸国の国民も、同じ制度の中に入るじゃないですか。それはコーデル・ハル版グローバリズムです。

因みに合衆国憲法第 16 修正が 1913 年にあって、そのあと直ぐ最初の所得法律を作ったのはコーデル・ハルです。要はアメリカという国を全く違う国に切り替えたのはルーズベルトとコーデル・ハルとその側近で、まず、この半球版グローバリズムが出来て、あと日本が主体となっているアジアをアメリカ版グローバリズムに編入したいっていう動機があって、コーデル・ハルのハルノートというのは、多分、日本と戦争すればアメリカが勝つだろうと思って…」

水島「うん、うん」

モーガン「う～ん、まあ、日本と戦争がしたいから、そのような文章を突き付けて、でも日本側からすれば、それは望んでいる事と言いますか、アジアを解放したいと思えば、やはり、そのような文章は歓迎すべきで、インパール作戦は大成功で終わったじゃないですか」

水島「うん…」

モーガン「ラダ・ビノード・パール (Radhabinod Pal) は自由、独立したインドからね」

シュラー「うんうん」

モーガン「1947 年、インドは独立しました。それは日本のお陰です」

シュラー「うん」

モーガン「ビルマもベトナムも」

シュラー「インパール作戦で本当に 4 つの師団で侵略した。3 つが日本人、一つはインド人。このインド人はシンガポールで捕虜になっていて…」

モーガン「そうです」

シュラー「兵隊が Indian National Army っていう国立軍で…」

矢野「国民軍…」

水島「うん」

モーガン「そうですね」

シュラー「それは戦後、インドの方に、はっきり自由みたいなことに…」

モーガン「ですよ。何故、出来たかって言うと、日本が真珠湾を攻撃した日と同じ日にシンガポール、香港、イギリスの牙城を自分のものにしたじゃないですか。日本は大胆な事をやりました。その当時の日本からすれば、当然なことをやった。でも、私達は80年間の吉田茂日本に暮らして来て、日本はその様な事をするはずがないと多分、何処かで勘違いしている。でも、その当時の日本は、世界の非白人のヒーローだったんですよ」

シュラー「そう」

モーガン「あの当時の日本は凄いことをやったんですよ。だからこそアメリカとコーデル・ハルとそのような白人至上主義者は、絶対に日本を潰したいと思っていて、それはコーデル・ハルのハルノートの意味じゃないかと考えています」

水島「なるほどね。結局、今、お話を聞いて、この討論でよくやっているのは、今の日本の状況、それから、中国がアメリカと同じ戦勝国じゃないかと」

モーガン「はい。全く嘘ですけどね」

水島「日本の盟主を許さない。アジアの盟主は中国、そしてアメリカ、一緒に世界を支配しようというような流れで、習近平からトランプに電話をしたっていうことが言われている訳ですよ」

モーガン「ええ」

水島「それから敵国条項を、また言い出している」

モーガン「はい」

水島「そういう意味では、流れが非常に似ているというかね」

モーガン「はい」

水島「こういったありもしない要求を突き付けるとかね、まあ、高市さんの発言なんていうのは、ことの是非はともかく、少なくとも我々から見たら理不尽な、何故、それで軍国主義がまた生まれちゃったとか、彼らに言われなきゃいけないんだっていうのがね、こういうことを言われている訳でね、やっぱり、もう一つ、今、しっかり言って下さったけど、モーガンさんが言っているように、アジアの中で初めて有色人種の日本人が、ここは我々の世界だと」

モーガン「そう」

水島「アジアは有色人種が主役になるべき世界だということを言い始めてね」

モーガン「はい、そう」

水島「こんな危険なものは無かった」

モーガン「そう」

水島「それと中国は、そういう意味では、蒋介石政権が浙江財閥始めアメリカの金融資本家とベッタベタにくっついてた。ということを見ると、誠にやっかいな日本という国はね、潰さなきゃいけない」

モーガン「そうですよ」

水島「大きくさせちゃいけないっていうことがあって、これは、せっかくなので、ぱぱあっとやりますから観て下さい。これはアメリカと日本の関係です。1880年代から、まず中国人が入って来ると。ここで『アジア人排斥』が始まるんですね。それから1907年に、日本政府が自発的に移民を制限する事を自分達でやり始める。1907年に、日本は事実上、それで停止するんですよ。労働者移民を入れなくする。

それから、ここで、もう排日運動が始まっていると。1913年、カリフォルニア州は、排日土地法。日本人の土地所有を禁止する。それで国際的には、もう重大な差別ですけど、一応、政府も抗議はしていると。

それで1924年。未だ排日移民法、日本人移民を完全に禁止する。もう凄いですよ。アメリカは国家として初めて日本人を『入国不可能な種族』として規定する。『入国不可能な種族』という、もう人種差別もいいところです。ここまで日本人は大変、親米的だった訳ですけど、反米感情が出て、三宅雪嶺とか色んな人達が、中央公論とかで、怒りの声を挙げる。

そして1930年代から1940年、もう戦争になるんですけど、1939年、対日通商条約の破棄。これは、アメリカが破棄した訳ですよ。1911年以来の『日米通商航海条約』も米国が破棄。経済圧力を始める。

1940年。もう、いよいよ航空機用燃料の対日輸出を禁止。軍事能力の弱体化を狙って露骨にアジアにそういうことを始めた。それから1940年は、もう完全に屑鉄（スクラップ）禁輸。日本の鉄鋼生産の74%がアメリカからの屑鉄に依存していたから、これは、もう日本の産業基盤を完全に壊そうと、ずう〜っとやってきている。

そして1941年7月に対日資産凍結。在米日本人と日本企業の資産は全て凍結。つまり在米日本人というのは、向こうで生まれた日系二世も全部、入っているんです」

シュラー「うん。うんうん」

水島「英語を喋っている日本人も日本人として扱っている」

シュラー「アメリカ国籍でもね」

水島「はい。アメリカ国籍ですね。アメリカ市民ですけどね。それでも、ここでは、こういうことをした。だから、こういう人達は国際金融取引が無理になる。そして1941年8月には石油の全面禁止。日本の石油輸入の88%が、当時はアメリカからだった。それは今、矢野さんが言ったように、これを押さえられちゃったら、本当に東南アジアのインドネシアのパレンバンとか、あっちへ行かざるを得なかった。これだけやられちゃうと。そして、もう直接的な原因として、これが一番、大きな原因としてやられるんですけど。

そのあと1945年、駆け足で行きます。これで負けたあと1945年。GHQ。経済の非軍事化―民主化の目的で財閥解体、農地改革、教育制度改革。実質的には、アメリカに

よる全面規制。農地改革と言ったって、本当は大地主が居て小作人が居るのは封建的だっ
て言ったけど、実は非常に共同体として纏まっていたんですね。こういうものを全部、解
体していく。

そして1952年迄対外貿易の自由はない。講和条約が結ばれるまで。日本は単独で貿易
協定を結ぶことが出来なかった。1950年代、もう冷戦下に入りましたけれども、対日
輸出入の管理。対米輸出に『輸出自粛』を要求された。覚えていると思います。

繊維、テレビ、家電、日本側が外国の圧力を受けて、所謂、自粛をする。この名の下は、
自粛ですけど強制ですよ。送って来るんじゃないって言われてね。

1970年、段々高度経済成長へ行く時です。1977年、対日貿易自動車制限。自動車
制限を要求。輸出も自主規制と言われたんですね。米国のビッグ3が壊滅的な打撃、クラ
イスラーとか色んな所が駄目になっちゃいました。ということで、自主規制の下に輸出制
限の実態。これは全部、命令でやっていますよ。

1985年、プラザ合意。これは米国主導で円高を誘導。1ドル240円だったものが、
120円まで強引に上げられた。これは2倍になっている訳ですから、凄いですよ。こう
いう形で日本の輸出産業が大打撃を受けて、中国や東南アジアや色んな所に行かざるを得
なくなる。そしてマクロ経済崩壊。対日経済戦争の頂点として、この辺りが扱われると。

そして、もう今、はっきりしていますけど、1986年、日米半導体協定。50%以上、
60%以上を占めていたと言われる、日本の半導体企業が価格制限。

日本製半導体には100%の報復関税。これによって日本の半導体は崩壊状態になって、
今、もう全然、見る影もない。長期的な打撃でNECやToshibaやHitachiもガタガタに
なっちゃった。1989年。スーパー301。これも日本を不公正貿易慣行国に指定され
る。これを全部、アメリカがやっています」

シュラー「うん」

モーガン「お前に言われたくないと（笑）」

一同「（苦笑）」

モーガン「反論したいですね」

一同「（苦笑）」

水島「はい。日本を『不公正貿易慣行国』に指定すると。報復関税自動発動が可能に。こ
ういうようなことですよね。それから1990年代から2000年代。いよいよ我々の国
の経済が構造的にガタガタにされて行く。新自由主義経済。グローバリズム経済。日米規
制改革イニシアティブというようなことで、それも年次改革要望書。要望書ですよ。

でも、これを見て解るように、この年次改革要望書を見ていると、翌年から自民党の政策
は、全て本当に見事に年次改革要望書の通りに進んでいる。この要望書が止まったのは、
民主党の政権が一時、執った時に要望書から報告書に名前だけ変わりましたがね。こ
ういうような形で、ずう～っと小泉改革まで続いている事。

そして、今、こういう中で言うと、2018年、鉄鋼、アルミ、（トランプ政権）安保条項

を理由に日本製、これ25%の関税、今、ご存じのように、日本の新日鉄のあれは向こうへ行きましたけどね。それから2020年、対中半導体。対中半導体封鎖への『対日協調圧力』日本と中国がくっついてやることは絶対に許さないと。というようなことが色々あります。

そして最後のところですよ。2025年、公開政策文書に、対日自動車関税の再強化。対日黒字是正の圧力、日本の中国投資制限の『同盟義務化』、日本の対米投資に税制制限（外国資産課税の議論）。まあ（苦笑）お解りになったと思います。こういう形で、1900年時代から始まっている。

そして、これも、せっかくだから言っておきますね。これは別の人が言っていることですが、1945年、戦後にやられたこと。アメリカは日本国憲法を変えた。九条。一夜にして日本を平和主義、去勢国家に変えたっていうね。それから1955年、途切れなく政権を維持して来た自民党は、文字通りCIAによって資金提供され、生み出された政党である。作戦名が『タケバンバ』はい。あとM資金なんかも関わっていると言われてます。それから2025年、5万4千人の米軍が今、駐留しているんですけども、その多くは沖縄に集中。本島の20%占有。ということと同時に、この5万4千人は、元海兵隊のシュラー小林さんに聞けば解りますけど」

シュラー「ああ、分かります」

水島「実戦部隊は殆ど居ないっていうね。もう朝鮮半島からも日本列島からも引き揚げて、殆どハワイ、西海岸に戻ったと言われてます。だから、いざとなったら我々がやるしかないっていうね。アメリカは直ぐ戦えないですよ。

それから1985年のプラザ合意を強制され、円は意図的に過大評価されて2倍になりました。そしてバブル。『失われた数十年』というのは、実はワシントン製だった。

日本の政府が色々拙いとか、財務省が悪いとか言ってますけど、現実には、こういうことです。そして、日本は戦争で核を投下された唯一の国。賠償ゼロ、有意味な謝罪はゼロ。『日本の罪』についてのみ、永遠の反省を要求されているということですね。こういう誇り高いサムライの国は、今や映画とコスプレの中にしか存在しないと。

実際の刀は1945年に没収。武士道精神はサラリーマンの過労死文化に置き換えられたと。これは皮肉で言っているんですけどね。

それから、日本は『思いやり予算』と呼ばれる駐留経費の大部分を事実上、『自らの占領者への家賃』、つまり家を持っている者が借りている者にお金を払っているという、非常におかしなパターンになっている。年間40億ドル以上のお金を払っている。

アメリカの議員は『日本は自分の占領費を自分で払っている』と誇らしげに語っているというね。これは事実ですよ。非常に悔しいですけどね。まあ、こういうような時系列を見ると、我々の国はハルノートを受け取って、それで戦争を始めて負けた。敗戦になった代償は、こういう形で文字通り無力化されている。

アジアの中で、絶対に有色人種の独立自治は許されない、実は、雁字搦めの状態にされているんじゃないかと。動きが取れないように。これも言っておきますね。問題点です。1960年安保の極秘条項。

『日本では未だに秘密にされているがアメリカでは公開』『米国は日本に核兵器をいつでも持ち込む権利を持ち、日本は艦船に何が積まれているか質問することすら禁じられている』。いいですか。そして日本の首相は、全て就任数か月以内にワシントンへ『巡礼』して、指示を受ける。抵抗した者は、2009年の鳩山さんとか、あとは辞めされたあと、安倍さんとかは失脚、又は死亡という状態。

それから、今言ったことで大事なものは、ここですね。自衛隊は内閣解釈により、アメリカの承認が無い限り、集団的自衛権を行使できない。基本的には、米海軍の巨大な補助部隊である。

つまり今度、自衛隊とアメリカの在日米軍の統合司令部を創った。じゃあ、これでミサイルを撃つのは誰だということ、アメリカですよ。高市さんが有事の時、武力行使するかどうか。これを決めるのは高市さんじゃないということですよ」

シュラー「そう、そう」

水島「アメリカ軍が決めるんです。辛いけど、悔しいけど、現実には、事実として認めなきゃいけない。このことが今、全然、言われていない。高市が立派な事を言ったとか言わないとかね、そんな問題じゃなくて、現実はどういうことになっている。これは、実際、アメリカが書いているんですよ」

モーガン「ここまで屈服させて自慢しているんじゃないですか。あの連中は、ずっと前から弱い日本を望んでいるんですよ」

シュラー「そうそう、そうそう」

モーガン「弱い日本を。ちょっとでも立ち向かって牙を見せれば、CIAの工作員が来日して、総理大臣とか、例えば、奈良市内の道端で横になっているとか、日本の総理大臣が、占領軍の空母に上がって拳を突き上げて、へへへえ〜と笑って、それを見て、どれだけ、気持ちが悪いことをやっているかと、本人は解っていないし、やっぱり80年前の日本人は格好良かったな」

水島「うん」

モーガン「やっぱり、あの連中に物申す昔の日本人は、今も必要だなあと思っています」

水島「うん」

モーガン「今の総理大臣なんて、ここまでされるんですよ。自民党がアメリカンパワーの媒体になって、ハルノートは結局、大成功しました。それも言い難いんですけども、誰がこの状況を変えるのか」

シュラー「そういうことを言うと、私は日本に住んで51年になります。昔、日本に来た時、もう50年前だから戦争経験者が大体、その時で50歳ぐらいまで」

水島「うん」

シュラー「で、彼らと会って話をすると目つきが違う」

モーガン「うん」

シュラー「何か自信を持っている」

モーガン「うん」

シュラー「でも段々、そういう戦争経験無い日本人と交流すると、昔、流行った言葉で、お〜っ、国際的な外国人、素晴らしいとか言うよ。凄い Give me choco 時代で育ててとか、軍経験がないから自信を持っていない」

モーガン「うん」

水島「うん」

シュラー「全然、違う。だから、これから、そういう日本人に戻らなければならない」

水島「うん」

シュラー「もう時代がこれから、アメリカもはっきり国内から腐っています」

水島「うん」

モーガン「アメリカ国民としては、こういうことは一切、望んでいないし、アメリカ国民が何を望んでいるか。ワシントンがこういうことをする訳で、やっぱりこのような文脈があるから、ハルノートが出来ると言えると思います」

矢野「ハルノートを書いたのが共産党員ですからね」

シュラー「うん」

水島「そうですね」

シュラー「大統領が変わっても、そういう永遠の、英語で言うと Establishment とかがワシントンに居るんですよ。いつもの同じ、共和党でも民主党でも関係なく。永遠に仕事をしている官僚がいっぱい居るよ」

モーガン「中国がアジアを担当してくれることも変わらない。80年前から」

矢野「だから内戦で共産党を勝たせた訳ですね。中国が共産化したということは、グローバルイズムの中に取り込んだ訳ですよ」

水島「そうですね。だから、本当に今、トランプと中国は仲良くし始めたって言っていますが、元々の姿に戻り始めているって言うか、つまりアジアで日本が各国を解放したとか、そういう歴史は一切、消し去りたい。戦勝国達が軍国日本をやっつけて、こういう今の状態をつくったみたいだね、そういう21世紀の歴史的な見方というのかな、こういうふうになろうとしているって、本当に我々はそこに気が付かないと、大東亜戦争で戦われた人達に誠に申し訳ないというか…」

シュラー「これから危ないのは、本当にウクライナが間もなく崩壊。本当に、ずっと言っているけど、間もなく崩壊。それでアメリカの中で、じゃあ、中国でしましようって、勿論、中国で使うとすると、日本を利用して中国に進める。自分達の力が無いとか、じゃあ、その器として日本を使うとか、それ、要注意しなければならない」

矢野「日露戦争型の代理戦争ですよ」

水島「そうですね。いや、でも言いたいのは、我々の国がそれだけ未だ怖がられているというところがあるっていうね。だから、我々がしっかりしていけば、また変わる可能性はあると思いたいと、私は思っているんですけど。

これを書いた人が言っているのは2025年の日本は歴史上、最も成功し、礼儀正しく、そして徹底的に『家畜化』された保護国であり続けている。その鎖はドルと基地、罪悪感でできており、大半の日本人は最早、鎖の存在すら感じていない、というね」

モーガン「その通りです」

シュラー「感じない」

水島「本当に悲しいけども、私がよく言うのは、サファリパークの檻の中に居て、自分達は自由に生きて何か言っていると思うけど、実際は飼われているだけで、猿山のボス猿を選んだりしているだけだっていうね。そこから出発しなきゃいけないから、高市さんに最初から期待したりするということよりも、むしろ何も出来ないということを前提に今、見た方がいいと。

だから、そういう見方をしないと、何処かでまた間違うかも分からないとね、今、保守系の人っていうのは高市礼賛というのがあるけど、ちょっとヤバイなあと思っているんですけどね。つまり高市さんがゼレンスキーになる可能性が凄くあるっていうね」

シュラー「うん」

水島「そうさせちゃいけないんですよ。それから日本人を殺させる訳にはいかないっていうかね。もう東アジア、まあ、これは矢野さん達と議論した時も、パレスチナがもうじき終わる、終わるっていうか、いい形では終わりませんが、パレスチナが終わる、ウクライナが終わる、そうすると戦争屋達は今度、何処に持って来るかと言ったら、朝鮮半島、台湾、日本ですよ」

シュラー「うん。うん」

水島「はい、どうぞ」

モーガン「あ、矢野先生、どうぞ」

矢野「日露戦争当時と違うのは、日本には備えが無いということです、今のところは」

水島「そうですね」

杉原「全くです」

矢野「日露戦争の頃は明治維新以来、もう国力、総力を挙げて富国強兵をやった訳ですよ」

水島「うん」

矢野「それで何とか戦い抜けた。だけど今の日本に備えが無いのに、代理戦争を本当にやったら大変なことになります」

水島「そうです。我々が戦うんですよ」

矢野「間違いなく核恫喝をかけられます」

水島「アメリカ軍じゃないですよ。C S I Sのあれも、最初にまず日本に戦って貰って、それから米軍は出て行くよ、みたいなね。我々はその間にやられますよね。小堀先生、ハルノートが本当に変な形で実現しちゃっているというかね（失笑）」

一同「（苦笑）」

水島「全部、中国から何からアジアからも撤退して、小さい国になりなさいみたいなね」

小堀「うん。まあ、しかし、日本がアメリカに支配されてしまうという原点が、ハルノートだったという認識ぐらいは得られたと」

水島「そうですね」

小堀「こう考えて、それじゃあ、どうするかっていうのを、これから来るあとの世代の人の問題になりますね」

水島「うん、そうですね」

小堀「私共は言葉を尽くして、それを知って貰うより他にもう特に出来ることは無いという、そんな気持ちがありますね」

水島「何かねえ。８０年かけて、ここまで来ましたからねえ」

小堀「ええ」

水島「そう簡単に明日、明後日で劇的には変わらないかも知れないけど、でも言い続ける人がちゃんと一人でも居るっていうことが大事だと思いますね。どうですか、我々の中で出来ることっていうのは色んなやり方があると思いますけども、ここまで来てしまった日本の姿で、どうしたらいいかと言うとおかしいけど、どうですか。中々難しいですけどね」

杉原「私はね、一つの仮説では無いんですけども、占領が終わってから、要するに自虐史観が日本を覆った訳ですね」

水島「はい」

杉原「そのリアクションは左だけが担いだんじゃないくて、国家自体も外務省の責任を隠すっていうことは、国家が自虐史観でなくちゃいけなくなっちゃったということですよ。ですから、その頃の平和論というのは、戦争で死んでいった人を居ない風にするとかね、無視するとかね、そういうことで平和を語っていたんですね」

水島「うん…」

杉原「しかし、今の人達は、そこは無くなったと思うんですが、要するに特攻で死んだ人達を偲びながら平和を語るという風に、ちょっと変わって来てはいると思うんですね。だから、そういう状況は状況として改善しているというけれども、今、言われたような国際関係の中で、そういうことを、きちんと国際関係を自覚した上でね、やっぱり、今の置かれている立場ですね、そして、私に言わせれば戦後８０年の嘘の時代ですよ」

水島「うん」

杉原「戦争で死んでいった人達を無視して平和を語るっていうのは、おかしいですよ。そういうことから脱皮しつつあるけれども、まあ（苦笑）そういう檻に入れられた状況を自覚していないということは、ちょっと言えるんだろうねえ」

水島「この間、丁度、お出でにもなったけど、憂国忌で話したのは三島由紀夫さんがね、70年安保の時、左翼と刺し違えても死ぬって言って、でも、その左翼が火炎瓶と鉄パイプを振り回しただけで、機動隊にあっという間に蹴散らされちゃった。敵が紛い物だったと。本気で革命なんかやるつもりもない奴らだということが判った訳ですよ」

杉原「そうそう。そういうことなんですね（笑）」

水島「そうすると、三島さんは、何をしたいか分かんない。ふっと気が付いてみたら、サファリパークの檻の中に、実は、猿山でキャーキャー、わあわあ、左だ右だって言っている奴は居るけど、本当の敵なんか居ないっていうね」

杉原「いや、それはねえ、あの東大紛争の時にね、我々は誰か一人ぐらいは投身自殺すると思っていた訳ですよ」

水島「そうですね。一人も居ない」

杉原「誰もしなかった。あそこ（失笑）」

水島「これねえ、私は、あの時も話したんですけどね、三島由紀夫が言ったのは、そこだったんじゃないか。つまり東大全共闘が安田講堂に籠って火炎瓶を投げて騒いでいたけど、三島さんが言ったのは、機動隊が押し寄せて来たら、全共闘の学生一人ずつ屋上から飛び降りると。日本の戦後民主主義なんか柔いから、それ、やられただけでビビって学生逮捕なんか出来なくなっちゃう。どんどん、やれって。

あれはねえ、自分の姿だったんじゃないかっていうね。誰もやらなかったから。それと、もう一つ、三島さんが言っているのは、全共闘は理解を求めていたんじゃないと、決意を求めていたんだと、日本人にね。それを、おっしゃる彼自身がそうだったんじゃないかっていうかね。つまり誰も居ないから、自分が日本を演じるというか、日本を現実化するしかない。あとは、みんな、紛い物だっていう意識があって、凄く孤独だったんじゃないかっていう感じがしたんですけどね」

杉原「それで…」

水島「うん」

杉原「もう一つ、ハルノートの延長で、ちょっと言わせて戴くとね」

水島「はい」

杉原「ルーズベルトが、いかに過酷な事をしたかって、これはね、ヤルタ会談で密約をするでしょ、そして、ソ連が入って来る。それを次の日にチャーチルが知るんですよ。で、チャーチルは何て言ったかと言うと、こういうソ連が入って参加するということを、日本に言って、それで降伏を勧告したらね、そこまでいったら、降伏するんじゃないかってね。でもルーズベルトは、それを聞かなかったんですよ」

水島「聞かなかったんですよ」

杉原「うん。そう。ということは、どういうことかって言うとね、ルーズベルトはドイツと同じように、連合国で日本を分割するというね」

シュラー「うん、うん」

杉原「ね。だからルーズベルトの考え方は原爆投下よりも、もっと恐ろしい事を考えていた訳ですね」

一同「うん」

杉原「そういう状況でトルーマンは、その政策を引き継ぐ訳です。けれどもポツダム宣言というのは、逆にドイツのようになっちゃいけないということで、つくった人がジョセフ・クラーク・グルー（Joseph Clark Grew）という駐日大使だったんですね。その人の銅像は日本に一つもないでしょ。日本が分割統治にならなくて済んだ、これだけの恩義がある人を無視しているというのはね、やっぱり未だ戦後は続いているというね」

水島「いや、全くおっしゃる通りですね」

杉原「(笑)」

水島「北海道の占守島から国後、択捉までソ連軍が入って来て占領するんですけど」

杉原「そうそう、そうそう」

水島「じゃあ、誰がソ連兵を運んだんだって言ったら、アメリカの軍艦ですよ」

杉原「(笑)」

水島「だから、あれは共同作戦ですよ」

杉原「そうそう、そう（笑）」

矢野「うん」

水島「ところが全部、露助が悪いっていう形でね、別に露助も悪いけど、一緒にやっている奴も居るんだよっていうね。それは一斉、出ないんですよ。これが戦後、我々が摺り込まれて来たところなので、そのチャーチルじゃないけどね、ロシアもアメリカも結局、同じだっていうことは、ちゃんと見ておかないと、そのところは、本当に必要じゃないかっていう気がするんですけども。

そのハルノートの問題で言うと、私が一番、心配なのは今、色んな条件が、例えばゼレンスキーがトランプから、或いは、ロシアから、いい悪いじゃなくて、私はウクライナの青年達が死なない方がいいと思いますけれども、ただ現実的にああいう形で敗戦国というのは領土も割譲するわ、多分、ゼレンスキーは追放されるでしょうね。

もう１５００億円の賄賂というか、ああいう汚いことを色々やっている。実際にウクライナの調査機関によると、ゼレンスキーの支持率が、もう３１％以下になっている。こういうことを考えた時、ああいうような要求の時、皆さん、どう思われますか。ウクライナは、まあ、私は勿論、元々はロシアが侵略したっていう風に単純に見ない方がいいっていう見方をしていましたから、こういうところまでやった時、ウクライナはどうするべきだと思いますか」

シュラー「いや、もう道もないですね。やはり、これからロシアの支配になるしかない」

水島「おお」

シュラー「現実的に、もうそうになっていますよ」

水島「うん、実際はね」

シュラー「もう、そうなるんですよ。ヨーロッパは何でも力が無い。それで、アメリカは今、運が良かったのは武器が無いです。武器も無いから。ロシアの方が生産出来る。アメリカはもう出来ない」

水島「うん」

シュラー「これからアメリカの国内の方は、本当に困っているんですよ」

水島「うん」

シュラー「だからトランプもヨーロッパから手放す」

水島「うん」

シュラー「手放す。本当に向こうのヨーロッパの方は、もうアナーキーになるんでしょ」

水島「いや…」

シュラー「それで…」

水島「うん」

シュラー「もうイギリスのスターマンとかドイツとか何かフランスの方は全部、マクロンの政府も無くなるんじゃない。革命に近いですよ」

水島「ああいう形で始めるとね、つまり、今言われているのは本当にアメリカで、さっき紹介したのは、アメリカの評論家ですよ」

シュラー「うん」

水島「次が日本のウクライナ化。ゆっくり、ちゃんと準備しているっていう」

矢野「あのう、私は、ちょっと異論があるんですけど」

水島「うん」

矢野「さっき言われたようにグローバリズムが、もう崩壊して来ている訳ですね」

シュラー「そうそう」

矢野「だから言われた様に、アメリカの軛というのは今、溶けようとしているんですよ。だから真の意味で、日本が自立化しなきゃいけない」

水島「いや、本当にそういうことですよ」

矢野「その覚悟と備えがあるかっていうことが、問われていると思う訳ですよ」

水島「我々がやるべきで、本当におっしゃる通りですよ」

矢野「だから、それは今迄の話であって、私は、これから変わって来ると思います。アメリカはそれだけの力を持たなくなる」

水島「グローバリズムのシティやウォール街が本当に全部、一緒の部分かと言うと、ヨーロッパのグローバリストと微妙にずれているところがある。つまり、今、フランスやドイツや、そういうものをベースに支えているのは、やっぱり、ヨーロッパ・グローバリスト」

シュラー「うん」

水島「ところがランプを、まあトンランプは、はっきり言って裏切っているところもあると思うんですけど、こういうのを支えているのはウォール街の、アシュケナージユダヤとか、こういう人達だから、本当に今、混乱の極みになっているので、どれを選択するかというのは、主語を日本にするしかないと思うんですよ。今、小堀先生がご退席の時間なので、最後に一言、戴いて…」

小堀「そうですね。我々言論人の責務としては、日本は今、もう、ここまで落ちていると。そして、この現実を直視しなければならないと。それだけです」

水島「そうですね」

小堀「決して、何とかなるだろうというのは、絶対に通用しない」

水島「そうですね」

小堀「それはハルノートに追い詰められた状況と、実は今でも同じだということですね」

水島「そうですねえ」

小堀「ええ。これを、特にあとから来る世代の人には、しかと認識して戴きたいですね。情けないけども、それを言い続けるのが、せめてもの我々の出来ることと言ったら、その程度だということですね」

水島「本当に、みみっちい希望でね、ぽっと、ごまかさない方がいいですよ。ちゃんと現実を見て、我々是对処する。小堀先生、有難うございました」

小堀「途中で退席させて戴きます」

水島「はい。どうも有難うございます」

小堀「どうも、お先に失礼致します」

一同「(礼)」

水島「はい。今、そういう先生からのお話がありましたけど、まあ時間もこういう状態になっているので、これから、こういう状態の日本の中で、我々が生きて行く道というのを、どういう形から出発すべきなのかということを逆に聞きたいと思うんですけど、モーガンさんからどうですか。何が出来るか出来ないか。出来ないだけでもいいですよ」

モーガン「出来ることは、いっぱいあるんですよ」

水島「はい」

モーガン「う～ん、但し、これはライブ配信で、何が出来るかと言える範囲が狭いので」

水島「はい」

モーガン「あと、色んな人に、そのような過激な事を言わないように約束しているので、何が出来るか、う～ん…」

小堀「すみません。お先に失礼します」

モーガン「あ、すみません、どうも」

水島「はい。お疲れ様でございます」

モーガン「どうも。まあ、曖昧な言い方ではないかもしれませんが、米軍基地が何処か判らない」

シュラー「うん」

モーガン「判らないと。８０年が経っても何をすればいいか解らないか、分からないはずがない。８０年前の日本人は何をすればよいかって分かっていました。だってハワイまで行って攻撃した程、凄かったですよ」

シュラー「うんうん」

モーガン「全世界規模で物事を考えていた昔の日本人は、極めて格好良かった。もう私からすればヒーローです」

水島「うん」

モーガン「私の模範です。先程、指摘があったんですけども、侍は、コスプレとかでしか残っていない。それは失礼。それは、ここにいらっしゃる方々に対して、小堀先生に対しても失礼ですし、戦っている用田先生に対しても失礼です」

水島「うん。

モーガン「侍は未だ居るんですよ」

水島「うん。

モーガン「今の日本の侍は、もう齒痒いと思いますよ」

水島「うん」

モーガン「戦いたい。う～ん、でも、やっぱり革命とか、そのような西洋的なことをしたくない。平和に物事を解決したいって。ここまで来て正直なところ、私はこの１か月ぐらい、かなり落ち込んでいます。高市という売国奴が首相になって、あいつが空母に乗ってワンシーン、パフォーマンスを見て本当に吐きたい程、気持ちが悪かったですよ。日本の保守の殆どは、それを見て、イエ～っと。良かったなあって、もう本気な人は居ないと思いました」

水島「うん」

モーガン「本気な人は矢野先生と用田先生ぐらいかなあと思いました。それで一時的に、ちょっと落ち込みました。ああ～っそんな、みんなパフォーマンス保守、ビジネス保守、月刊拝米とかを読めば、みんなが大絶賛。高市万歳とかって、仲間だと思った人でさえ、高市、良かったなあって馬鹿なことを言っていて、でも矢野先生、用田先生、水島社長、そのような侍はいらっしゃるから、未だ希望があるので、私も戦いたいなあって。

一つ出来るのは、日本だけではなくてワールドワイド、また物事を考えればいいなと。ボランティアでもいいから、日本人がロシアに行って一緒に戦えばどうですか。あと日本人が独自に北朝鮮まで行って、あの気持ち悪い金正恩と交渉して、拉致被害者を取り戻す」

水島「うん」

モーガン「悪いけれど、日本国内の拝米保守は、何回、米大統領に会うんですか」

水島「うん」

モーガン「拉致被害者のご家族は、米大統領に会う為に活動やっているみたいだけれども、そうじゃないじゃないですか。娘に会いたいじゃないですか。米大統領は、どうでもいい」

水島「うん」

モーガン「日本人の本当の侍が動けば出来る。日本だけではなくてワールドワイド。この間、フィリピンに行って来ました」

水島「はい」

モーガン「私がフィリピンで多分、これからワシントンが戦争を仕掛けて、フィリピンと台湾とかを戦場にして、日本人、台湾人、フィリピンの人々は沢山、死んでくれるんじゃないかと、私が言ったら、殆どの人が『それは、そうだね』と素直に認めました。この地域の人々は、みんな、見えるんですよ」

水島「うん」

モーガン「フィリピンの人々は、ワシントンの陰謀がもう丸見えですよ」

水島「うん」

モーガン「これから、そうなるんですよ」

水島「うん」

モーガン「台湾を巡って、フィリピンを巡って、戦争が始まって、自民党という売国奴がワシントンの為に日本人を大勢、死なせる。そうなる前に、今、動けばいいと思います。矢野先生、用田先生、色んな方々が動いているんですけども、絶望的な状況ではないと思います。でも、本当の事を言えば…、うん、ベトナムを見て下さい。数十年間、ゲリラ戦をやりました」

シュラー「うん。うん」

モーガン「やっと、あのヤンキーを追い出した。そうしない限り、あの連中は帰らないよ。以上です」

水島「はい。シュラーさんはどうですか」

シュラー「私は、これから、やっぱり教育が大切と思っていますよ。特に昔の戦争。で、やっぱり日本は悪くない。私も英語で言ったら、日本帝国が本当にFilm Fighter です」

モーガン「そうフィルム・ファイターです。その通り」

シュラー「昔、入った会社が警備会社だった。出張でタイへ行ったんですよ。タイ陸軍に日本産の盗聴器の販売。面白い仕事だった。あの時にパーティに行ったんですよ。タイ軍から招待された。色々将軍も居ましたよ。タイの田舎の方」

水島「うん」

シュラー「私、小林って名前もあるんですよ、日本の名前もあるから。タイ陸軍の大佐に紹介された。これはマックスです。彼の本当の名前は、小林で日本人です。彼は、うちと一緒に。日本が頑張ったからタイには今、自由がある。そういうことを言っていたんですよ。戦争の時、日本が頑張ったから。だから、海外には、そういう考えもあるんですよ。私は、これから特に若者に望みがあるんですよ」

水島「うん」

シュラー「高市政権の方は、高市さんは一つね、私は凄く嬉しい。アメリカが圧力をかけて、今、ロシアから天然ガスを買っているんですね。それ、やめなさいって言われて、やはり、あちこちの国に、そういう制裁をしているんです。高市さんがアメリカにNOって言いましたよ。おお、おおと、いいですね。参政党も今、現れていますよ。新しく本当に日本で強い日本を創ろうということで、アメリカは国内の問題が、もう段々深くなっていますよ。本当に内戦、近くなっているんですよ。」

これが日本のチャンス。アメリカが弱くなると、じゃあ、うちも強くする。うちの国内、国内の方は左、右と色々あるけれど、でも日本は色んな問題あるけれど、内戦に向かっていない。はっきり言うと左は段々年寄りになって、若者の方はちゃんと日本の誇りを持って日本の為に努力することを教えるべきだと思っています。それも努力。これから、私も努力したいと思っています」

水島「なるほどね。はい。矢野さん、どうですか」

矢野「さっき小堀先生が言われた『ハルノート 書いた男』という本を見たんですけど、その中で書かれている事の中で、非常に重要なことは、ハルノートを書いたハリー・デクスター・ホワイト（Harry Dexter White）は共産党員で、陰でソ連と繋がっていたということが明確に書かれているんです。その当時のソ連の担当者、ヴィターリー・グリゴリエヴィッチ・パヴロフというのが証言しているんですけど、ソ連側からハルノートに対して原案で投げかけたものというのは、要するに、ソ連の立場では当時の独ソ戦を想定して、とにかく背後から日本に突かれないようにすると。」

その為に日本を懐柔するというので、例えば満州の引き揚げについても、まあ、要求は出しているけれども、同時にソ連側も兵力を引き揚げるとか、そういう融和的な政策を、敢えて入れているということが書かれていて、それに対してアメリカが、この実際のハルノートの中では、そういう要求を撥ねつけて、最終的には満州の問題については、わざとぼかしているんです」

水島「うん」

矢野「これは一体、何を意味しているかと言うと、要するに日本の問題については、もうソ連は口出しをするなということを、もうその時から暗に狙っていると。つまり日本の、先程、分割占領と言われたんですが、アメリカは当初から、日本を全土占領すると。単独占領をすると。日本を完全に屈服させて、更に中国を共産化する、或いは市場化していくという、そういう大きな戦略を、もうハルノートの段階から持っていたんじゃないかという風に思うんですね。

だから、先程から出ていますように、この在日米軍基地の問題も、今の日米安保の構造の中で、地位協定によって規定されているんですけども、日本全土の何処にでも基地を造れるし、いつでも訓練が出来るという全体の構造の中になっている訳です。それと北方領土の問題が典型ですけど、もし日本に返還した場合、アメリカ軍基地が、そこに造られるんじゃないかと。それに対して、そうはならないということを保障しろということをロシア側が要求した訳です。結局、それが日本側も譲歩が出来なかったんですね」

水島「安倍さんの場合は、そこですよ」

矢野「つまり日米安保の構造が根本から変わらない限りは、今の従属的状态、アメリカによる単独占領、それと周辺国との分割統治。例えば竹島もそうですし、尖閣もそうですし、全てその元の根源、問題を煽っている本当の正体は何かって言うと、実はアメリカの左翼な訳ですよ。グローバリストですよ。今の拉致問題さえ、そういうことが背景にあるかもしれないし、経済については、もう完全に未だに箍が、まあ、最近では、また色々な新しい形態を執っていますけれども、ずうっと続いていると。で、日本の技術と経済力を占めて、そしてアメリカに奉仕させると。

財政も含めて、そういう構造になってしまっている。だから、そのこのところを根本的に変えない限りは、今の従属状態は続くと。一番、危険なのは、アメリカの力が衰えて直接、傘をかざすという核もそうですし、通常戦力にしても、実質的にはもう破れ傘になってしまっている。期待できない訳ですよ。

アメリカは本土の防衛が重要で、それこそ、この間、ブレヴェスニクという無限に飛べるという巡航ミサイルとか、ポセイドンという原子力推進の核兵器が出てきましたけど、ああいうものが出て来ると、米本部自体の防衛が、アメリカの唯一最大の安全保障の目標になって、いやでも西半球に戻らざるを得ないという体制になっていますから、そういう時に梯子を外された時の日本が丸裸で、例えば、中国共産党独裁の軍事大国や南北朝鮮が統一して核大国になった時に、その脅威に単独で晒されるってことです。

その危機が目前に迫っているにも拘わらず、未だに、この冷戦期の従属的体質っていうものを抜け出そうという努力をやっていない」

水島「うん」

矢野「一番、言うのは、やっぱり、さっき言われた様に、この現実を知ることなんですよ。過去の歴史を知ると。日米開戦が何故、必然的に起こったのか。何故、ルーズベルトが、あそこまで執拗に日本を戦争に追い込もうとしたのかという、その本質というのは、やっぱりグローバリズムというものがあつたと。それが、ずうっと現在まで続いて来たけれども今、やっと、その縛りが溶けようとしているので、逆に、それは、ある意味で

力の空白を生むので、危険もあると。だから日本は自立化を急がなければならぬ。

その時に一番、重要なのは、やはり富国強兵で、重要な強兵の核は、やっぱり核保有だと。原潜に核を持つ。それから、もう一つは、教育による知識の普及と、特に、歴史観の見直しですね。それとメディアの改革。こういうことをやらなければいけない。つまり、言論空間を取り戻さなきゃいけない。

今の言論空間は全てGHQの政策以来、統制され、管理されている。言論の自由なんか、無いです。そこから取り戻さなきゃならぬ。その時に日本の固有の伝統的文化とか縄文以来の歴史と、その中で培われた日本の国体とか固有の価値観というものを、もう一度、再発見すべきですよ」

水島「うん」

矢野「そこが一番、重要だと、私は思いますね。精神的自立をね」

水島「本当に現状の分析というか、現実には本当におっしゃる通りだと思うのね。我々が今、やっているのは、例えば、我々が国体と言った時ね、一番、はっきりしなきゃいけない皇室の在り方と、この国が誰の国だっていう。これは、やっぱり天皇の国な訳ですよ、私から言うと」

矢野「はい」

水島「だから外国人は土地を買ったり、外国人に売っちゃいけないっていうのは、そこですよ。自分が所有権を持っている土地じゃないです。開拓した土地じゃないです。天皇がお造りになって、それぞれに…、だからGHQは、農地改革とかをやって、小作人に、みんな、土地を加えて、みんな、お前らのもんだよと。そうじゃない。

本当は、みんな、お預かりして所有権として持っている。売り買いもするっていうね。この感覚が完璧に西欧の在り方と違う。八紘一宇という言葉だって本当は単なる、みんなのヒューマニズムじゃない訳ですよ。まず、そういう天皇の国、この国の土地は無数の先祖達のものであって、外国の人に勝手に中国だ何だと言って売っちゃいけないというのは、そのところがあるっていうね。まず、その前提が全然、無くなっちゃっているから、みんな、所有権とか、それぞれ西欧近代主義的な権利を持っていると思ってやっているから、皇室に、ああだこうだ言ったりね、土地を平気で中国に売ったりとかやっているというね。

根本的なところ、おっしゃるようにね、教育とか、それと、もう一つ言うと、この間も丁度、議論したんですけど、我々の国は、やっぱり侍精神というのは、実は朱子学から来ている。神道と朱子学と禅。禅とか仏教。この3つから総合されているっていう感覚があるんですよ。

それが明治維新で西洋近代化したけど、朱子学と仏教は無くなっちゃったんですね。だから江戸時代迄の元老政治ぐらいまでは、そういう匂いを持っていたけど、東条英機みたいな陸軍大学の最優秀学生みたいなのがトップになっていくと、そういう近代主義的、ドイツ的な軍隊とかね、戦いの意識がそういうものに、軍人の意識で、侍の意識じゃなくなって来る。

本当に私達がもう一回、やらなきゃいけないのは、実際は中国やアメリカの圧政の下に生

きなきやいけないかも知れないけど、こういう精神、日本人はこうだったっていう精神をずっと残していかなきゃいけない。さっき小堀先生もおっしゃっていたけど、今、そのみみっちい希望を与えられちゃ、みんな、誤魔化されてきた訳じゃないですか。申し訳ないけど高市さんだって、保守系の人の頼みだって喜んだ人は沢山、居る。はしゃぎまくっている人は沢山、居たんですよ。それで小泉進次郎が防衛大臣になったら、中国はどんどん膨張して危険だなんて言ったら、褒めちゃうんですよ。そんなの言う必要ないですよ。態々仮想敵だと言ってつけ込まれないで、我々はどんなことをやっても、あらゆる手段を使って日本の国民の命と国を守るって言えばいいだけですよ。

高市さんも本当はそうだったんですよ。そうしたら、もう核武装するじゃないかって心配するから。例えば、農政大臣だって、また米を減反するって言っている。需要は、供給は市場に任せる。何故かと言ったら、アメリカの小麦とかを入れるんですよ。つまり全部、グローバリズム政策です。小泉さんは、恐らくアメリカの武器を買うんですよ。40兆、使って」

シュラー「うん」

水島「ね。それで、じゃあ、消費税減税をやりましたかって。やりません。せいぜいガソリンの税率の何かね、あれをやるだけで、むしろグローバリズム政策をぐんぐん推し進めている。そういう本質を見抜かないと、だから、私は最初から、入る時から、もう駄目だと言っていた、期待はしちゃいけないと言ったんだけど、これはそういうことですよ。

具体的に政治が、みんな、グローバリズム政治だから、何かいいことがあったら言って下さいと。まあね、一佐、二佐から大佐、中佐に変えるとか、或いは、もっと期待していた移民の問題だって、法律を変えなくても運用で出来るんですよ。厳しくすればいいだけの話で、それもやっていないですよ」

杉原「うん、ちょっとね、皇室の問題が出ましたでしょ。私は、皇室典範の改正ね、男系のあれをやるというのは大体、国民の世論で大体、了解をとることがね…、皇室典範というのは、いつ変えればいいという問題じゃないんですね。今、変えなきゃいけないんですよ。本当に皇室は人間の姿で存在している訳でしょ。誰でも歳をどんどんとっていかれる訳ですよ。そうすると本当は、高市さんの一番、最初にしなきゃいけないのは皇室典範の改正だと思うんです」

水島「うん、あのう…」

杉原「だから、いつしてもいいという問題じゃなくて、するなら直ぐしなきゃいかんというね。皇室の中で、まあ、とにかく生きていらっしゃる人間でいらっしゃるんだから、それに合わせて早くやらなきゃいけない。それが、やっぱり、最初ですよ」

水島「おっしゃる通りでね、それを悪い方に変えようとする人達が沢山、居る訳ですよ」

杉原「だから、その、あれは、もう、だから、もう…」

水島「だって今、世論調査やると女性天皇肯定論。はっきり言うと、愛子内親王殿下を天皇にというのが70%超えているんです」

杉原「う～ん、だから、そのところは、もうバシッとやってねえ」

水島「バシッといかない（笑）」

杉原「変えてねえ（笑）」

水島「もう一つは、やっぱりパークやチェスタトンじゃないけど、墓の下の民主主義っていうイメージで、昔の人達が2千年以上、守って来たものが…」

杉原「そうそう、それを守るという前提でね」

水島「未だ変えちゃいけないっていうことと…」

杉原「そうそう、そうです」

水島「それと、もう一つは、昔の方に戻るっていうのはいいですよ。つまり旧宮家の復活とかね」

杉原「そうそう、そうそう、そういうこと」

水島「ということなら未だいいけども、もう女性天皇だとか、はっきり言えば今だって、ちょっと制度的にどんどん変えちゃっているじゃないですか。だから本当にねえ、やっぱり古く見えるかも分からないけども、無数の人達のねえ…」

杉原「いや、ですから、そのうねえ…」

水島「先祖の知恵を生かしてやらないと」

杉原「ええ、だから、そのう…」

水島「本当に変えようとしている人が多いですからねえ。私が危険に感じるのは、例えば、私がずうっと批判して来た参政党の皇室論はね、神谷君というのは最初、女性天皇を言っていたんですよ」

杉原「ふう～ん」

水島「そして、我々は、それを批判したんですよ」

杉原「うん」

水島「なんだ、これは男系男子じゃないのかって言われたら、男系に変わったんですよ」

杉原「うん」

水島「男系っていうのは愛子内親王殿下も入っていますからね。だから男系になるだろうと。男系男子じゃないのかって言ったら、また変えて男系男子だって（失笑）ね。それから旧宮家の復活はどうなんだって言ったら、旧宮家の復活。それもいいと」

杉原「（笑）」

水島「側室制度をやろうって、そこまでいっちゃった」

杉原「あそこまで行く必要はない。ええええ、ええ」

水島「そうしたら、今度、あの共産党員の篠原常一郎が未だ参政党の中に居るんですよ。だから怒鳴り込んで行って、神谷を説得したって自慢しているんですよ。昭和天皇が、あ

の側室制度をやめたんだから、そんなことを言っちゃ駄目だって言ったら、ああ、解りましたって、また変えたんですよ。だからね、私は、そういう風に、いい方に変えてくれるのはいいけども、こういう形で大した頭も持っていない連中がね、先祖の知恵っていうのを、すっ飛ばして、ああだこうだやって悪くする方を、やっぱり逆にね、ちょっと心配になりますか」

杉原「(笑)」

水島「だって女系と女性天皇の差が分からない人は今、多いですよ。それで、もう一つは国民主権ということ自体、国民主権じゃないんじゃないのと。天皇の国なんだよと。そういう畏れや、それをちゃんと思ってやらなきゃいけないんじゃないですかってね、みんな、平気でああだこうだ言うからね、っていうのが、ちょっとあるんですけど、だから、我々が最後の希望と言えらしたたら、皇室がどんな感じになって行くにしろ、ずっと存続して貰うことが最後の砦になると思っているんでね。これは、どういう方になってもお守りしなきゃいけないっていう気はしているんですけどねえ。うん」

杉原「ちょっとルーズベルトの話」

水島「はい」

杉原「先程、ルーズベルトがチャーチルにソ連が参戦するんだったら、それを日本に告げて、ソ連が入る前に降伏しなさいという風に言えば直ぐ戦争が終わって、どれだけのアメリカ兵とか日本兵が助かるか。ところが大勢が亡くなったのは、最後の1年に殆ど死んでいるんですからね。ですからアメリカ兵を救う為にも、そういうチャーチルの言っていることは正当だったんですよ。だけれどもルーズベルトは無条件降伏を要求するし、無条件降伏を要求する根拠は何だったかと言うと、真珠湾で騙し討ちをしたというね。

でもルーズベルトは日本の外交電報を全部、読んでいたから、あれは、ただワシントンの日本大使館の事務的ミスだったということを始めから知っていたんですね。

だけど、それは一言も言わないで、騙し討ちをした。そして、それで無条件降伏という、本当は当時としては国際法に反するんですけどね、それなのに条件を突きつけて、今の様にやった訳ですね。そういう騙し討ちだということを、ルーズベルトが言える根拠を作ったのは、結局、日本大使館ですね。それにも拘わらず戦後は、その責任者を外務次官に据えてね、そして外務省の戦争責任を全く隠す。そして、隠すことによって、結局、国家全体が自虐史観を担がざるを得なくなる、奉戴せざるを得なくなる訳ですね。

そういう状況を(笑)つくって、それで、この真珠湾の攻撃を、ルーズベルトは、事前に知っていたかどうかというのは、真珠湾から40年経った1981年頃、その時には未だ海軍の文書とかが公開されていなかったから、それまでの調査をしたことでしか喋れなかった訳です。

そうするとルーズベルトは証拠がないから知らなかったというのと、知っていたんじゃないかというのは、どっちも証拠が無いから言えなかったんですね。でも、それから又40年が経って、今、80年近くになってね、今、この平松茂という人が…」

水島「平松さん、はい」

杉原「ええ。ミネルヴァ書房というところから真珠湾の、ルーズベルトは知っていたとい

うね、これは抜群に証拠が全部、載っているんですね。一番大きなのは、真珠湾攻撃の二日前、アメリカだと7日ですから、4日の時点でシカゴ・デイリー・トリビューンというところにドイツをやっつけろという戦争計画が漏洩するんですよ。絶対の秘密ですよ。ルーズベルトは戦争しないという風に言っていたのにも拘わらず、そういう計画を作っていたというのが新聞に公表されるんですね。

それで1981年までの研究者の言っている事は、ルーズベルトはその時に慌てたと言うんですよ。それがバレちゃって…、だけど、この本に基づいたら、それはチャーチルと二人が意図的に漏洩させたんだ。どうしてかと言うと、日本が真珠湾攻撃をして、日本とアメリカの戦争が始まるかもしれないけれども、ドイツが仕掛けて来るとは限らないのね。

ヒトラーは、なるべく賢明にアメリカと衝突を避けようとしていましたからね。だから、ドイツを参戦させる為にはどうすればいいか、その戦争計画をバラせばいいんだっていうね。それで結果的には、チャーチルとルーズベルトが意図的に、その物凄く巨大な秘密を公開して、そして、ヒトラーからするとソ連とアメリカの二面作戦が危険だということを充分に知っているんですね。けれども、どっちみち戦争を避けられないと。アメリカが、これだけ準備してかかってくるんだから、未だ準備が終わっていない今の方がいいという形で参戦するんですね。

ルーズベルトは、そういう嘘を書いていたので、あの日本を壊滅するまで持って行かないと、日本に発言権が残るような降伏条件は認められない訳ですね。それで結果として、あの無条件降伏を要求して、そして、あのヤルタ会談の時には、チャーチルのあれをバツテンしてね、だから、それだけ日本は結局、騙し討ち、あの外務省のミスによって起こった騙し討ちによって、どれだけ日本が不幸な状態になろうかとしていたかということで、それにも拘わらず、それを外務次官にしてやるという…本当にまあ…」

水島「だから、今、おっしゃるように、その時の外務省の役人も怪しいと思うんだけど、今、高市さんがウクライナについて二度、発言しているんですよ。就任直後ののは、有名で、私達日本はウクライナと共にあると。ね。それで一緒に戦うと。実際、3兆円を送ったお金の中で言われているのは、あれでアメリカの武器を買わせて、それで攻撃させる。

つまり、我々が支援したお金は何処へ行ったか分からないって答えないんだけど、実際には、そのお金でアメリカが儲けるようになっている」

シュラー「うん」

水島「それで武器を買わせてウクライナに与えて、戦いをさせたと。こういう構図でやって、実際、アメリカは本当に参戦しているんですよ。この間はトマホークを態々日本でやって、それで今度はアメリカに送っているじゃないですか。それを今度は、向こうへ送るみたいなね。もう戦争のシステムの中に組み込まれている。

それで、もう一つ、この間、また言ったでしょ、ロシアが侵略しているから戦うと。高市さん、或いは、官房長官も言っている。これは本当にどうするつもりだろうと。我々は、結局、復興支援もやるって言っている訳だから、また我々はお金を出す訳ですよ。そうするとね、一番の問題は、何処が金を持っているかって言うと、韓国と我々ですよ。

金融資産とか、つまり国民の預貯金や色んなもので千何百兆ぐらい。これを戦争になると

使わざるを得ない。武器とか弾薬とか色んな形で、また買う訳ですよ。もう金融資産を、掃き出させちゃう。８３兆円の投資をするって、財源、財源と言っている我々の政府が、こんな大盤振る舞いでアメリカへ送る訳でしょ。それで農林中金のお金ですか、五十何兆円。これも又、向こうへプレゼント、ああ、１５０兆でしたっけ」

矢野「１５０兆」

水島「ちょっと間違えました。百五十何兆円。これも、また向こうへプレゼントするって。つまり何故、東アジアが危ないかって言ったら、戦争を起こしたら、これだけお金が儲かる。アメリカやそういう所に、お金が入って彼らは景気良くなるし、Make America Great Againが文字通り実現しちゃう。私達は、やはりこのことをちゃんと見ておかないとね」

矢野「ルーズベルトのニューディール政策も結局、失敗したんですよ」

水島「ああ、そうそう、そう」

矢野「だから戦争を起こして、資金管理をするということですよ」

シュラー「それで儲けて」

矢野「そういうことですよ」

水島「だからね、これねえ、本当に…」

矢野「まあ、同じことをやっている訳で」

水島「戦争を起こしたのは、ルーズベルトがニューディールで失敗したからですよ。だから戦争を始めたかったんですよ」

矢野「そうです。それもある」

水島「実際、もう一つ、我々も言わなきゃいけないのは、朝鮮特需で日本の経済が復興のきっかけを持ったって。それからベトナム戦争で、私は大学生だったから覚えているけど、ベトナム特需が凄かったですよ。前に沖縄で取材したことがあるけど、あの当時は米軍の兵隊さんが明日、ベトナムへ出撃するからって、お金を掴んでバンバン樽の中にドル札が入るぐらい、もう、やけっぱちで、みんな、やっていたっていうのを聞きましたから、エーサインバーっていう所でね。だから、そのぐらい戦争になると、日本が、そうなるんですよ。はい、どうぞ」

モーガン「今おっしゃっている事は全く同感で、８０年間、この戦後日本は平和の国だと。それは大きな嘘です」

シュラー「うん」

モーガン「戦後、日本は平和な国ではない。グローバリスト、言ってみれば戦争屋の構図の中に入っていて、今、目の前に動いている戦争屋、日本人もアメリカ人も、日本に居るアメリカ人戦争屋も今、動いていて必死に台湾を巡る戦争を勃発させようとしていて、それが一つの反省点で、日本人が反省して８０年間、平和な国だねえと、それは一つの大きな欺瞞に過ぎない」

水島「うん」

モーガン「もう一つの点と点を繋ぐ一つの大きな、矢野先生が、いつもおっしゃっているグローバリズムとか私は全く賛成で。アメリカが提供しているグローバリズムって、それを深掘りすれば、それは人種差別主義っていうか白人至上主義。500年間、続いている白人優越主義が、ただ変貌して仮面を被っている」

水島「うん」

モーガン「でも相変わらず、白人のワシントンが全世界を支配している。但し、今、非常に皮肉なことになっているのは、ヨーロッパが逆に転覆して、アメリカの植民地になっている」

水島「うん、うん。まあ、その可能性はありますね」

モーガン「もう日本がアメリカの植民地であれば未だマシです。植民地の方が未だいいんだけれども、社長が見せて下さった人種差別の履歴と自民党、まあ、民主党もそうですが、自民党がどれ程、ワシントンの為に日本国民を苦しめているか。そういうことを知らない人は、日本では多分、殆どだろうと思って。植民地だったら未だマシだけれども、戦後日本は植民地にさえなっていない。戦後日本は戦争屋が、この国をずっと支配して来た。

でも、それはどういう戦争をやっているかって言うと、それは人種差別の為の戦争。ベトナム戦争はその通りです。非白人を殺戮する為にこそ戦争をやっている。イラク。だってイラク戦争に参戦した日本人も居るんですよ」

水島「うん」

モーガン「それを自慢話にしている人も居るんですよ。そのような人々、日本人が反省すれば、私は未だ希望があると思うんですが、日本人はそもそも人種差別は、多分、嫌いだと思いますよ」

水島「うん」

モーガン「でも無意識に、人種差別的な世界規模構図に日本が入っている訳です。間接的ながら、日本の納税者もそれを支えているんです」

水島「うん」

モーガン「支えたいとは思わないと思うけれども、納税する度に、消費税を払う度に、我々日本に住んでいる人々が、白人優越主義的世界規模構図を支えている訳です。それはどういうことか、グローバリズムは何処まで白人が非白人を殺しているとか死なせているとか。日本人としては多分、入りたくないと思うので、反省して目覚めて、そのようなことを一刻も早くやめて戴ければと思っております」

水島「そうですねえ」

シュラー「これから本当にアメリカから色々な命令が来ても、例えば、中国と、これ、やって、あれ、やってとか言われても、日本は延ばせばいい。直ぐ反応して、はいはい、頑張りますとか言うより、いやあ、それ、やりたいけれど、こういう問題がある。何か問

題、作ってとかね」

水島「うん」

シュラー「本当に半年、1年でアメリカ国内状態が結構、酷くなると思う。あと、ちょっと、私は、この番組で前も言っていて、アメリカの石油が無くなっています。シェルのプレミアベースは今、テキサス州でしか採れないんですよ。でも、これも段々もういっぱい。もう採れないですよ。これから下がる。だから今、ベネズエラの方に色々やっているって。ベネズエラでマドゥロ大統領も、もうあげる。あげても足りるかどうかね。本当に段々アメリカの手が無くなっている。

トランプさんも2週間、10日前ぐらいにFOXニュースのインタビューでローラ・イングラムというアナウンサーで同じ説、直接、聞いていないけど、これから中国から60万人か学生を中国から入れる」

水島「留学生を入れるってね」

シュラー「そう。それで同じように言っているのは、同じ説、同じ文章じゃない、同じ説。アメリカはミサイルを造る為に、アメリカ人はもう出来ないみたいなことを言っていて、えっ、ちょっと待って、これは別のティムキャスト（Timcast）という番組を観ていたけれど、えっ、中国人を運用してアメリカの武器を造って、それで中国と戦争するの？ちょっと待って、これ、何かおかしいんじゃないかなとかね。ああ、アメリカは、ほんと困っている。エンジニアも居ない。技術者も居ないんです。

私は前から言っているけど、何処でも段々インフラでも国内インフラでも失敗、失敗が出ているよ。もうシャットダウンの方も1か月ぐらい前に一度、シャットダウンもあったんですね。また、ありそう。来年1月に入って、また、ありそうね。段々国内も混乱もなっています」

水島「いや、そうですねえ」

シュラー「アメリカから日本に命令が来ても延ばして。日本は直ぐに、はい、そうしますとか言うより、そうしたいけど、私達日本人は、こういう問題でと言って時間を長くしていれば、もうアメリカは段々出来なくなる。段々出来なくなる」

水島「丁度ね、この間、私の番組で言ったんだけど、日本の30年もの国債が、3%になったって、今迄、0.何%ですよ。つまり、そういうヘッジファンドとか色んなものが、日本の国債、円を買って調達して、それで他の金利の高い所へやって、その差額で凄い儲けていた。でも、日本の今の高市政権になってから、30年ものですけど3%になった。これは結構、そういうヘッジファンドや色んな所で資金調達やって、日本を利用してやっていたところが出来なくなって来ると。これも、ちょっと長期的に結構、ヤバいことだと。

それと、もうひとつは昨日か一昨日、ソマリアの近くにあるエリトリアという国の大統領が発言したのを映像で観たんだけど、何故、アメリカは紙を刷るだけで、我が国の鉱山や企業をどんどん買えるんだと。紙を刷っているだけじゃないのかと。それも金本位制じゃないですから、もう、ずうっとそうだけど今迄、信じていたけど、こんなのおかしいんじゃないのと、真面に言い出している。

つまりドルを刷れば何でも買えるっていうね。こういうアメリカのドル基軸通貨体制自体

に、もうブリックスやそういうのが、みんな、疑問を持ち始めている。紙を刷れば、それで何でも買える国と、そういうので企業や鉱山を、みんな買い取られていく開発途上国の人達の問題というのが、もう節々に色んな所に出ているから、トランプ大統領って今、本当に、まあ、別に同情する余地は無いけども、今、おっしゃったようにアメリカは内部でも外部でも本当に苦しい状態になって来ている。だから、私が心配なのは、そうなるが一番、手っ取り早いのは、戦争で金を集めるっていうことになるんじゃないかと。そうすると、一番、都合のいい、優しくって、ちょっと馬鹿っていう国民を利用するんじゃないかっていうね」

一同「(苦笑)」

水島「うん。そういうことですよ」

シュラー「ね」

水島「うん。そういう意味で、本当に我々の国の、いやあ、我々って言っても、皆さんは我々じゃないですけど、私は、もういい歳だから、まあ、いいけども、うちの子供達とか孫とか、そういう人達はもろに影響を受けますからね。さっき現状を言ってくれたけど、例えば、自衛隊とか、そういう緊急に何か具体的な事で我々が出来ることってありますか」

矢野「それは大きく言えば3つあると思うんですけど、一つは核武装するということ」

水島「うん」

矢野「それを国民が支持する。日本には、それだけの力がありますから」

水島「うん」

矢野「それから二つ目は、国を守るのは我々なんだと。国民自身だというね」

水島「うん」

矢野「そういう自覚をもって、それに出来る範囲で積極的に貢献することですよ。場合によっては米軍が、我々を守ってくれと。国民は守られる存在だというのは誤解、錯覚をしていると。それは、あの憲法自体がそういう構造ですけど、戦後の言論空間、特に教育とかメディアが、そういうことを国民に摺り込んでいるんですよ」

水島「うん」

矢野「だから守られる存在じゃないです。自分達が立ち上がって守らなければ、この国は、もたないということをね、精神においては国民皆兵ですよ。それをやらなきゃ駄目だと思うということですよ。」

それから、もう一つは物的基盤っていうか、経済の問題で、これから成長戦略の中心は、軍事産業です。特に関西はそうだと思う。それは先端技術の塊ですから、軍民両用分野なので、それをやれば経済も再生すると思うんですよ。その点については高市政権の成長戦略というのは、私は、それなりに評価はするんですけども、しかし肝心の魂が入っていない。

一番の問題は、大東亜戦争開戦の時もそうですけど、日本側が何故、あんなに、アメリカ

が交渉に対して冷淡で日本を追い込んで行ったかっていうことは、最後まで結局、根本原因が判らなかったと」

杉原「考えなかったんですよ（苦笑）」

矢野「うん。それは今になって、先程から議論が出ているように、本質的にグローバリズムだと。つまり世界政府を創って国境の壁を無くして、一部、エリートが大衆に君臨するという独裁体制をつくるという大きな流れが、もうフランス革命以前の啓蒙主義からずうっと流れがあるんですよ」

水島「うん」

矢野「この流れを、はっきり自覚して問題点を突いて、このナショナルなもの、日本固有のものを、もう一度、再発見して、それを武器にして盾にして生き残ると。その生存戦略が今、問われていると思うんですよ。だから、やはり、その現状を知ることが、まず出発点で、その根本原因は、今日はハルノートのことが焦点になりましたけれども、大東亜戦争も然り、それから幕末、明治時代のあの開国も然り、何故、やらなければならなかったか、それは植民地状態を避ける為です。

それでね、人種差別の問題、先程、言われましたけど、何故、日本を執拗に攻撃したのかと言うと、日露戦争に勝った時に、アメリカの黒人奴隷が手を叩いて喜んだんです。それを見ていて白人エリート層が、日本が黒人を使って反国家の暴動を起こすんじゃないかということを心配して、それで日本を集中的に攻撃した訳です。

だから排日移民法とか、ああいうのが出来ていったんですけれども、そういう背景がある訳です。だから日本が出過ぎたが為に、成功したが為に警戒心と嫉妬を招いて、それが日本に対する集中的な人種差別政策になったと。それが日本国民の憤激を買って、まあ、昭和天皇も独白録で言われている様に、一端、軍が決起した時には、もう、それを抑えられないという風になってしまったという、まあ、そういう火薬庫の発火点の素地があったということですよ」

水島「そうですね」

矢野「それが、例えば日本の上層部が、いくら抑制をし、不拡大の方針を執っても、アメリカは戦争を挑んで来る。そして、それに対して、先程、ハルノートの公開の話がありましたけど、公開すれば日本国内に於ける戦争派と言うか開戦派。開戦論者も結構、居ましたから、彼らが逆に、それを口実に開戦に一挙に持って行く可能性もあったと思うんですよ」

水島「うん」

矢野「だから、その辺のところのバランスが非常に難しいんですけども、しかし、いずれにしても日本指導部の不拡大方針についても、アメリカとの和平交渉にしても、全て潰されて行って、最後は、やっぱり国民一丸になって自存自衛の為に決起するしかないということまで追い込まれていったと。

もう一つ言いたいのは、日本が戦ったことにより植民地解放、人種平等を達成したのは、事実ですけども、実はアメリカは、それを黙認して泳がせたという面もあって、イギリスの植民地帝国を解体して、アメリカが次の世界覇権を握るという、そういうグローバリ

ズムを徹底することによって、中国、ロシア、アメリカと、そして残されたヨーロッパと言うんですか。これもヨーロッパでEU、NATOが出来たのは、正にグローバリズムなので、これによってグローバリズムで世界を覆うという、その構造を創ったのがルーズベルト政権ですね。

だから、私は日本が何故、利用されて、そして、そのあと、その力を封じ込められて来たというのが日本の構図じゃないかと。だから誇るべき歴史かもしれないけど、ただ、それだけでは喜べないと。敢えて米軍がそれだけの力があつたにも拘わらず、何故、日本軍の残った人たちが、植民地解放の為に独立闘争を支援するのを黙認していたのかと言えば、それは、やっぱりアメリカの利益があつて、この際、ヨーロッパの植民地帝国を全部、潰すという意向もあつたと。

だから、そこには、ある意味、日米間の了解と言うか、暗黙の合意というものがあつたかもしれないですね。だけど、ある意味、日本は利用されたと」

水島「日本はその時、合意できるほど余裕が無かつたと」

矢野「いや、だからアメリカの黙認と言った方が正しいかもしれませんね。それは日本の功績であるということは確かですけど」

水島「おっしゃるようにね、アメリカがイギリスに代わることになったことは確かですよ

ね」

モーガン「ああ、ごめんなさい」

水島「ああ、どうぞ、はい、どうぞ」

モーガン「ごめんなさい。杉原先生が冒頭のところで、ルーズベルトは狡猾であるという風におっしゃって、多分、日本人はルーズベルトって、どれ程、狡猾だったかと解っている人は、ほぼ居ないような気がして」

杉原「ああ、アメリカ国民も知らないでしょ」

モーガン「アメリカ国民も知らないし」

杉原「あんなワシントンのあそこに堂々と銅像を造っちゃったんですからね」

モーガン「そう。あのルーズベルトってあいつは悪魔だったんですし。私が違和感を覚えているのは、もうルーズベルトが悪魔だったって、それは当時のアメリカ国民もよく解っていたし、今の日本国民も知るべきだと充分、思っていますが、でもハルノートに焦点を当てて考えると、どう考えても、世界史の見方が、ちょっと歪んで来るって、ハルノートよりも、私は大東亜会議を大きく採り上げたいような気が致します。やはり大東亜会議は今、矢野先生がおっしゃった、それが一番、恐ろしい事だったと。

白人は一人も居ないんですよ。非白人が主権を執って、自分の国の事を自分で決める。しかも元植民地の中からヒーローが現れて、まあ、色んなやりたいこと、目論見はあるんですけども、白人がもうアジアを支配しない。その大東亜会議は本当に画期的で…」

杉原「そうそう、そうそう」

モーガン「ハルノートというのは、それはオールドスタイルで引き続き白人が支配する。

でも大東亜会議は、それは未来ですね。バンドン会議から、もう70年になっているんですね。インドネシアのバンドンですか」

水島「はい」

モーガン「1955年。日本がそれに参加したんだけど、それはアメリカのやり手として、要は、日本が骨抜き日本になって、10年前までの日本とバンドン会議の時の日本とは全く違う生き物で、でもバンドン会議と、そのバンドン精神は、日本の不在は、その時は、中国が主役になる、中国とインド。日本の不在は、やはりアジアからすれば大きな損害ですよええ」

杉原「まあ、まあまあ、まあ。ええ」

モーガン「もしバンドンに日本が主役であれば、中国を抑えて、日本がもっといい方向に向かわせることが出来たと、本当に歯痒いところだなあと思います」

水島「おっしゃる通りです」

矢野「そこがアメリカの愚かって言うか見えないところで、本当はドイツと日本を上手く使って、共産主義を封じ込めれば良かったのです」

モーガン「そうですね」

矢野「それを潰してしまったんです。だから自分自身が全て面倒見なきゃいけない」

モーガン「全く同感です」

矢野「今、国力を消耗して現在の状況になっている」

モーガン「本当に、そうなんですよ。今、抱えている問題は全部、日本が昔、ほんとに…」

シュラー「そうそう、そう。だから、ヨーロッパのノルドストリーム、あのドイツのロシアからの天然ガスですよ。もうアメリカ、やりましたよ。はっきり言うと」

矢野「うん」

シュラー「あとは、こう言っていたんですよ。何かバイデン政権の中、誰かスポークスマンが、忘れてるけど。フォルクスワーゲンみたいな会社でも、やっぱりドイツから出てアメリカに来て、工場を造ればいいと」

水島「うん…」

シュラー「だからドイツの産業も潰す。はい、分かりましたけど。ドイツも困っているから、じゃあ、アメリカに来て、アメリカで会社を創って、え〜っ、それって何かね」

水島「あれは本当にね。シュラーさんはドイツ系だからね」

シュラー「うん」

水島「色んなことだと思いますけど、ノルドストリームというか、あのパイプラインが破壊されたあと、ドイツがこんな短期間でボロボロになっちゃったじゃないですか」

シュラー「もうボロボロですよ」

水島「あんな、立派、立派と言うか凄い国だったのがね」

シュラー「うん」

水島「それだけでねえ、未だ何十年も経っていないですよ」

シュラー「ね」

水島「それで、これだけ経済も何もガタガタになるっていうのを見ると凄まじい、こう、ちゃんと計画を持ってドイツを大きくしない。だって一時はEUの中で盟主って言われていたじゃないですか」

シュラー「うん」

水島「もう神聖ローマ帝国の始まりみたいなところまで言われていたんですよ。ドイツはEUで一人勝ちだったから。ところが、これがウクライナの問題を、きっかけに本当に、もう見る影もない。大きな企業は、みんな海外へ行っちゃっているし、電気代はめちゃくちゃ高いね。うん、これは川口マーン恵美さんが、よく、そういう話をレポートしてくれるんだけど」

シュラー「もう本当にドイツ人の生活も苦しいんですよ。何か話を聞いているとシャワー浴びるとかは、脇の下と股のところとか頭だけ洗えばオーケー。だから、お湯が無いんですよ」

水島「可哀相に（苦笑）」

一同「（苦笑）」

シュラー「本当に私の祖国ドイツが、そこまでいっている。本当に自分の心は悲しい」

水島「ねえ」

シュラー「本当に悲しい。まあ、私はドイツへ行ったことないけど、ドイツ語は喋るけど、行ったことがないけれど、両方の為に戦うことは出来ない。あと、気を付けなければいけないのは今、ドイツの民主主義が無くなっています」

モーガン「うん」

水島「そうですね」

シュラー「だから直ぐナチって言われるよ。それで虐めに来るんですよ。何かドイツの方にコメントするとか何かね」

水島「本当に言論の自由があまり無くなっているっていうね」

シュラー「無くなっている」

水島「聞きますけども」

シュラー「だから日本の為に集中しています（苦笑）」

水島「それとね、やっぱり、さっき矢野さんからも言って貰ったんだけど、結局、今、中国と日本が対立しているっていうのを少し、さっきのモーガンさんの言い方すれば、アジアの見方とかから見れば、中国と日本が対立して誰が一番、喜ぶかっていうね」

モーガン「そこが知りたいですね」

水島「もう、判っているじゃないですか。ね、対立してくれた方がいい訳でね」

矢野「ずっと、そう」

水島「こういうようなことの視点がなくて、例えば、あまり言いたくないけど、あの産経新聞が昨日の一面トップで出したのは『友好関係が高市・トランプ電話会談で安堵』。安心したって。トップで大きな見出しで出ているんだよね。こういう発想をするのかと。つまり、トランプが深夜3時頃、高市と電話で話したいと、まあ、電話したのは7時間後だったんだけど、それで話したのは何か意図があるに決まっている。そんな夜中に、君、元氣？なんて恋人に電話するんじゃないんだから、何か意図が必ずあるという風に考えなきゃいけないのに、何故、こんなにナイーブというか、日米関係で友好関係が確認された。そんなはずないですよ。習近平とやったあとに電話しているんだから、ちゃんと、意図をもってやっているっていう発想がね…。

人間関係でトランプと高市さんが仲良くなりました、良かったねっていうね。この感覚。この発想しか出来ないのかと。トランプは全く違う人だから、そういう意味ではねえ。相手は、みんな、自己実現の為の手段だからねえ」

矢野「そういう点でも、歴史を知らないって言うんですかねえ」

水島「うん」

矢野「しかも、その表面的な歴史じゃなくて、深層の、その歴史を動かしている背景にある人間の、何て言うか、ある意味で言うと、大局的な、それこそ旧約聖書以来の、殲滅戦争を是認する様な…」

モーガン「そう」

水島「うん」

矢野「その憎悪とか不信とか、今の世界でも、そういうものが渦巻いているんだと。リアリズムです」

杉原「だからね、ハルノートを突きつけられた時に、そういう発想をしなきゃいけないんだ（笑）」

矢野「そうですよ。そこで二枚舌を使ってね」

杉原「ねえ。あんなこと、あんな…」

矢野「いなすぐらいの外交力とか情報量が無きゃ駄目ですよ」

杉原「ねえ」

モーガン「一点だけ強調させて戴きたいんですけども、社長が先程、見せて下さったあの一覧とか」

水島「はい」

モーガン「あと人種差別的なポスターとか、アメリカは一切、反省していない」

シュラー「ああ、ノー」

モーガン「一切。謝っていないし、今更、謝って欲しくないかもしれないけれども、言いたいのは、あのワシントンとルーズベルト、コーデル・ハル時代のワシントンは、一切、変わらない。同じ生き物です」

水島「うん」

モーガン「あの連中の空母、艦隊が、この国に来ている訳」

杉原「(笑)」

モーガン「ということは、1941年は未だマシでした。未だ太平洋の反対側に居てくれていて、未だマシだったんだけど、あの連中が日本に入って来て縄張りに入って、この国の政治家を傀儡している、そういう状態です」

水島「そうですね」

モーガン「それが言いたいです。ワシントンは原爆投下、ごめんなさいとか、勿論、一度も無いです。東京大空襲も…」

シュラー「ああ、オバマ元大統領が広島へ行ってとか、何か全然」

杉原「謝罪はしていませんから」

モーガン「謝罪は一切」

矢野「謝罪なんかしていない」

モーガン「あの原爆投下だけではなく、あのポスターはアメリカでは、そんなに知られていないと思いますが」

シュラー「あ、知らない、知らない」

モーガン「知らないでしょう。だってゴキブリとか、ドイツに関してそのようなポスターは作らない」

シュラー「よく頭蓋骨、死んでいる日本兵の頭を、よく集めたらいいとか何ね。ドイツの場合は、ドイツ人に、そういうドイツの兵隊、それ、一つの事件だけ。やっぱり、しなかった。ドイツは白人だから。アメリカには結構、ドイツ系が多いからね」

モーガン「それは、もうワシントンが反省したとか、人種差別、もう、やらないよおって、私もそう思っていたんですよ。でも歴史の深層」

矢野「うん」

モーガン「歴史を深掘りすれば、一切って言うか、今は正々堂々とまた、そういうことを言うようになっていくんですよ。トランプの側近とか。これは白人の国だとか、アメリカは一切、反省していないし…」

シュラー「あと、ベトナム戦争もあったんですよ」

モーガン「そうでしょう」

水島「一昨日ですか」

モーガン「はい」

水島「トランプ大統領が、所謂、第三世界というか、そこからの入国は一切、移民禁止したって、つい一昨日ぐらいに発表しましたよね。全然、変わっていないですよ」

モーガン「そうですよ。もうトランプは多分、自分がレイシストだと思っていないと思いますけれども、あの人は明らかに白人優越主義者で、南アフリカから来る難民、白人だけを受け入れるとか。それはアメリカの一番、深いところは、やっぱり白人至上主義で」

水島「そうですねえ」

モーガン「多様性とか共に生きるとか、共生とかアフリカ・ホームタウンとか馬鹿なことを言っている日本のリベラル」

水島「うん」

モーガン「本当に物ごとを解っていないなあと思って」

一同「うん」

モーガン「とにかく、もうサイコパスとは共生できないです」

水島「うん」

モーガン「サイコパスとはね。他の人とは未だ出来るかもしれないけど、相手がファウチとかであれば、殺されるに決まっているじゃないですか。あれがワシントンで、何も変わっていないことを強調したかったなあと思いました」

水島「原爆も東京大空襲も、一晩で10万人、ナパーム弾で殺すっていうやり方も、彼らにとって当たり前だろうと。例えばフランス・ Coppola の『地獄の黙示録』っていう映画を撮影した時、本当にフィリピンのジャングルを焼いたらしいんですけど、物凄いじゃないですか。あれはコンピュータ・グラフィックじゃないですからねえ」

シュラー「そうそう、そう」

水島「あれを日本でやった訳ですよ。ジャングルじゃなくて都市にやったっていうね。だから、これは、やっぱり、そういう意味では、相手は人間じゃないというね。何か危険で、こすっからい猿みたいなね」

モーガン「そう思っているんですよ」

水島「やっぱり、そういうことがあったんだろうと。いい悪いじゃなくて、みんな、それぞれ差別意識とか持つことがあるから、しょうがないんだけど、我々は自覚しなきゃいけないと」

杉原「いや…」

矢野「あのう…」

水島「それで、私が一番…」

杉原「その東京大空襲をやったカーティス・ルメイ (Curtis LeMay) にね」

矢野「旭日大綬章」

杉原「旭日大綬章を与えるなんて、これ、またナンセンスだね (苦笑)」

水島「そうです」

矢野「ナンセンス」

杉原「名誉が」

水島「名誉白人って言われたら、もう凄く恥ずかしくて嫌な感じでしょ。名誉白人って、何だ、これはっていうねえ」

モーガン「コーデル・ハルって平和賞を受賞したんですよ。ノーベル賞を受賞しました。コーデル・ハルが」

水島「ああ～」

モーガン「凄くない？ 凄いでしょ」

水島「凄いなえ」

矢野「平和賞って、そんなもんじゃないですか」

モーガン「そんなものじゃないでしょう」

矢野「いや、元々が (笑)」

モーガン「戦争賞でしょう」

水島「これでね、日本の場合は、そういう形で高市内閣が今、中国と対決しているみたいな形でやっています。内政に関しては正直言って、やっぱり殆ど全く変わっていないです。グローバリズム政策と言うか、岸田、石破、今、石破より悪くなっているのは、農業政策で、食糧安保のところは非常に悪くなっていると思うんですけど、これは外交的に日本がやるべきことは今、矢野さんが言ってくれました。やっぱり自衛核武装をやらざるを得ないのと、もう一つ、専門家で聞きたいのはレールガンっていうのはね」

矢野「ああ」

水島「これは、よく用田さんとかがね、話しているけど」

矢野「はい」

水島「どのぐらいまで希望を持つんですか。日本は結構、技術を持っていると言うけど」

矢野「リニアモーターカーの技術を応用しているって言われているんですけど、連射が利くようになっていますね。これは世界最先端です」

水島「ああ、そう」

矢野「ええ」

水島「じゃあ、やればいいのにね。あれは軌道を歪められるんでしょ」

矢野「まあ、そうですね。射程は千キロぐらい届くので連射機は迎撃がかなり、やり易くなりますよね」

水島「いいですよええ。ドローンもミサイルも可能ですか」

矢野「ドローンだったらレーザーガンでやった方が早いです」

水島「ああ、レーザーガンね」

矢野「はい。レーザーも高出力レーザーのギガワットぐらいが、もう出て来ているので将来性はあります、はい」

水島「だからねえ、そういうのが自前で出来るんだから、それをね、1兆円でも使って、ウクライナに送るならね」

矢野「ええ。だから、それを全体の防衛構想の戦略の下に束ねて、そして、その兵器システムとして実用化していくという、そういう戦略を自律的に回すサイクルが日本は全部、意図的に壊されているんです。軍需産業も情報分野も対情報も、それから国民の動員体制も全て壊されている。だから出来ない訳です」

水島「なるほど」

矢野「それが占領政策の眼目ですから。そのことは、今でも、ずっと同じです」

水島「有難うございます。ということで、今日もハルノートの話を議論しましたけど、今、中国が我々に要求しているのは、あの発言を撤回しろとかね、色んな形で相当、強引なことを要求している。だから無理して拙いなどと思っているところもあると思いますけれども、上手いやり方じゃないんですが、こういう武力と圧力をかけて来る。こういう問題は、これからもずっとあるでしょう。その時、どういう対処をするかっていう問題も問われて来ると思います。多分、今、一番、見られているのは、日本人の性根で、今、一番、びっくりしているのは、恐らく高市内閣の支持率が下がらなかったというのは、いい悪いじゃなくてね、少なくとも中国が脅かしたから野田さんみたいな形で妥協すべきだっという意見じゃないというのは、国民の間に少し何か、はかない希望かも分からないけど、あまり、はい、はい、はいはいと言っているのをやめようねというようなことがあると同時に、私は、いつも言うんですけど、中国がそういうことをやり出している時、今日、こういう表に出したように、アメリカも同じように、或いは、もっとキツくやってきたんだよということを知って、我々は独りぼっちで、ちゃんと、しっかり自分で生きて行かなきゃいけないというね。

それが本当の侍精神じゃないかと思うんですけどもね。まあ、そういう意味で、このハルノートは、色んな問題が突きつけられてきましたけど、これからは自立できる国になって行かなきゃいけないと思います。最後に一言ずつ載いて終わります。じゃあ、杉原さんから一言、はい」

杉原「今日はハルノートのことで随分、色々お勉強させて戴きました。どうも有難うございました」

水島「じゃあ、矢野さん、どうぞ」

矢野「この500年間で有色人種は、黒人の奴隷貿易とか、それから中南米でのインディオの虐殺とかですね、或いは、インド植民地支配の時に、かなり反乱に対して武力弾圧をやったり、やり返したり、死者を出して、数千万人が亡くなっているんですけど、合計約1億人以上、殺されているんですね。それが人種差別というか、この実態であって、そういう中で日本だけが唯一何とか耐え忍んで、この人種差別撤廃の先頭に立ったが為に、それ故に徹底的に叩かれたと。

その延長として、戦後日本がある訳ですけれども、そういう場合に、我々は一体、誰が本当の敵なのかということを、しっかり歴史から学び取るべきだと」

水島「そうですね」

矢野「そういう点で、明治開国以来、ずっとそうですけど、やっぱりグローバリズムの脅威というものをね、これは共産主義も含めて、ですけれども、もっと深刻に捉え直すべきだという風に思います。その教養が形を変えて文化共産主義っていうか、知識人の意識をリベラルに転換していくことによって、徐々に共産化、社会主義化の方向に持って行くという方法に変わっていますからね、そういう点では、やはり、さっき申し上げたように、言論空間をいかに正常化するかと。

その為には、やはり教育とかメディアの問題、それからエリート層の特に政治家とか財界人とか官僚のような方が今迄、欧米に留学して、大体、9割がたがグローバリズムの先生ばかりですから、そこで洗脳されて帰って来て、自分達は、エリートで時代の先端を行っているぐらい錯覚しているんですね。

だから、そこから糺さないといけないので、やはり日本人自身の教育理念とか、そういうものを、例えば江戸時代の教育の在り方というものから、もう一度、白紙に返って学ぶべきだと。だから極論すると、学校教育も根本から見直し、今のメディアも大幅な改革をして、丁度、12万人パージの時、最初に旧師範学校出身の先生方がパージされたんですけども、それと逆ぐらいのことをやらないと教育正常化は難しいと。

元々教育権は親にある訳ですから、親が学校から教育権を取り戻すと。それぐらいの運動でもやっていいんじゃないかと思いますけどね（笑）。そこから直さないと、もう日本は、立て直しが効かないと思います」

水島「ねえ、その親も教育しなきゃいけないっていうねえ（失笑）」

矢野「そうです。だから親が大体、おかしいからですねえ（失笑）、ほんと、どうしようもない」

水島「いや、ここまで来ちゃっていますけどね、でも、本当に一步一步やるしかないですよ」

矢野「うん、まあ、仕方ないです。それしか方法が無いです」

水島「私が、いつも言う江戸の時代のいい加減さっていうのもね、町人が贅沢三昧やった

り遊んだりしながら、それでも生活の基盤は、やっぱり武士道だったってね。遊びはやりながら、そうだったっていうのと。あと、もう一つは、ガチガチのそういう武士道じゃなくて、規範として武士道を選んでいて。町人達もね。農民達もそうだった。やはり、これは凄く大きな問題じゃないかなというのと、いつも言いますが、杉浦日向子さんという方がお亡くなりになりましたけど『江戸の良さは優しくて、愚かで美しい』って、町人達が。こういうところも日本の優しくて愚かで美しいっていうね。愚かっていうのは、いい意味なんですけどね。

あまり生きることには拘らないで、人に対して優しくて、そして美しいということが基準の一個になっている。粹とか野暮とかいう言葉がありますけど、そういうのもちょっと、私なんかも、そういうタイプじゃないんで忘れちゃいけないっていう気がしていますけれども。はい、じゃあ、シュラーさん、お願いします」

シュラー「まあ、本当に、これから日本は革命的に新しい面も始まっている。私の目って言うか、革命は始まっています。この前の選挙を見ていて、若者の目が覚めているんじゃないかな。そして、日本の歴史は縄文時代から入れると2万年ぐらいあるんですよ」

水島「はい」

シュラー「若者の目が覚めていると、これから動きが始まっていくんですよ。望みがあります。それは一生懸命、努力します。皆様、宜しくお願いします」

水島「はい。そうですねえ。有難うございます。はい、ではモーガンさん」

モーガン「はい。有難うございます。今日、先生方の前で、私も発表が出来て本当に光栄で、勉強させて戴いて感謝です。東郷先生のことが本当に心配で、あのう…」

水島「そうですね」

モーガン「本当に心配です。私は本当に心配しているので。教育が大事とか、そのような御発言は、私も教育の現場で毎日、そういう仕事をやっているつもりです。教育は本当に大事で、いい意味で、若者は本当に変わっていると。若者は本当に変わって来ていて、日本の良さに目覚めている人が増えている。本当に希望をもって、それは間違いないと思います。若ければ若い程、もう拝米保守が言っていることは一切、通じない。それは本当に、私も望みを持っている。それと同時に、先程、社長が見せて下さった自民党の理不尽リストとかワシントンの理不尽リスト」

水島「うん」

モーガン「ほぼ毎年、ハルノートが突きつけられている状態です」

シュラー「(苦笑)」

モーガン「それは1941年問題だけでは無いんです。それで今年もハルノート。来年もハルノート。昔の日本人は我慢してでも結局、もうこれ以上は我慢できないと、その日は、いつ来るだろうと。私は待ち望んでいて、それと同時に、もう時間が無いんです。もう時間が無い。高市サギエは、必死に戦争勃発をさせようとしていて、あの様に、危険な連中、要は戦争屋が今の永田町には、もう本当に蔓延っているので、次のハルノート迄、待ちましようとか教育をしっかりとやりましようとか。それはいいんだけど、でも、

もう時間が無いから、私は右翼に訴えたい。動いて。以上です」

一同「(苦笑)」

水島「はい。真面な右翼が登場してくれるといいんですけどね」

モーガン「本当に右翼が動けばいいと思います」

水島「はい。我々も色々考えて行かなきゃいけないと思いますね。それこそ、あまりね、色々なことは、表になって言えませんが、やっぱり一人一人日本人の自覚を持って。そして、ちょうどこの間の憂国忌っていうのは良かったと思います。

三島由紀夫っていう人がやった自決っていうのは、所謂、サファリパークで、自分が敵だと思ったのは、全部、紛い物だったって。じゃあ、誰と戦わなきゃいけないかって言ったら、この枠組みですよ。この枠組みを敵とちゃんとしなきゃいけない。その時、何が出来るかっていうこと、何をすべきかということが出て来ると思います」

杉原「三島さんは、あれだよ、天皇について『文化概念としての天皇』って言ったでしょ」

水島「うん」

杉原「あれは相当、深い意味があるんですね。ねえ」

水島「はい。あのう…」

杉原「あれは憲法学にも出て来ないですよ」

水島「そうです」

杉原「だけど憲法学だったら本当は、そういうものを抱え込まなきゃいけないんだけどね」

矢野「だからギリギリ国体はね、皮一枚しかない…」

水島「昭和天皇はね、人間宣言を為さった時、煙はハサミで切れないよと。まあ、そういう象徴的なことを、東大の教授が昭和天皇に話をしたら喜んでいたっていうね。これは、何度も使われたことで、煙はハサミで切れないけど、この煙を、そういう自覚をもって、我々が居なきゃいけない。切られないものを、我々の中にちゃんと持っていないと…、一番の問題は唯物論ですよ。さっきグローバリストって、ずっと言ってくれたけど、結局は唯物論者ですよ」

矢野「ちょっと一つだけ付け加えたいんですが、軍の侍精神というものの根幹を端的に示していたのが、旧軍人勅語ですよ。あれは日本の歴史を踏まえて、それで、そのエッセンスをあそこに盛り込んであるんです。今の自衛隊にはそういうものが無い」

水島「はい」

矢野「だから、それを、もう一度、取り戻して、あの精神を復活するっていうことが軍の再建、国軍の再建とか国民の防衛意識の中核として、その価値観を、もう一回、再認識すべきだという風に思います」

水島「そうですね」

矢野「はい。もう自由や民主主義の為に命かけるっていうのは欺瞞ですよ」

水島「はい。ということで草莽崛起ということしか無いと思います。はい。ということで、今日はハルノート、日米開戦は一体何だったんだっていうことで、皆さんとお話させて戴きました。有難うございました」

一同「(礼)」

***** お わ り *****